

11	小国613
学图	

教育部
資料室

文部省検定済教科書
財団法人
学校図書研究会編修

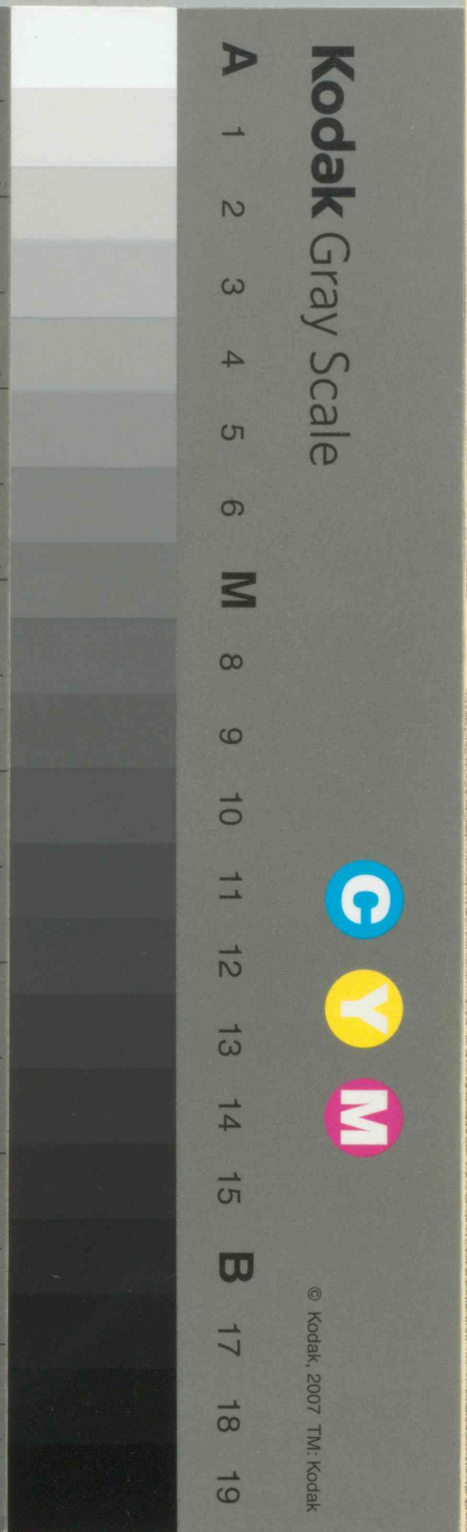
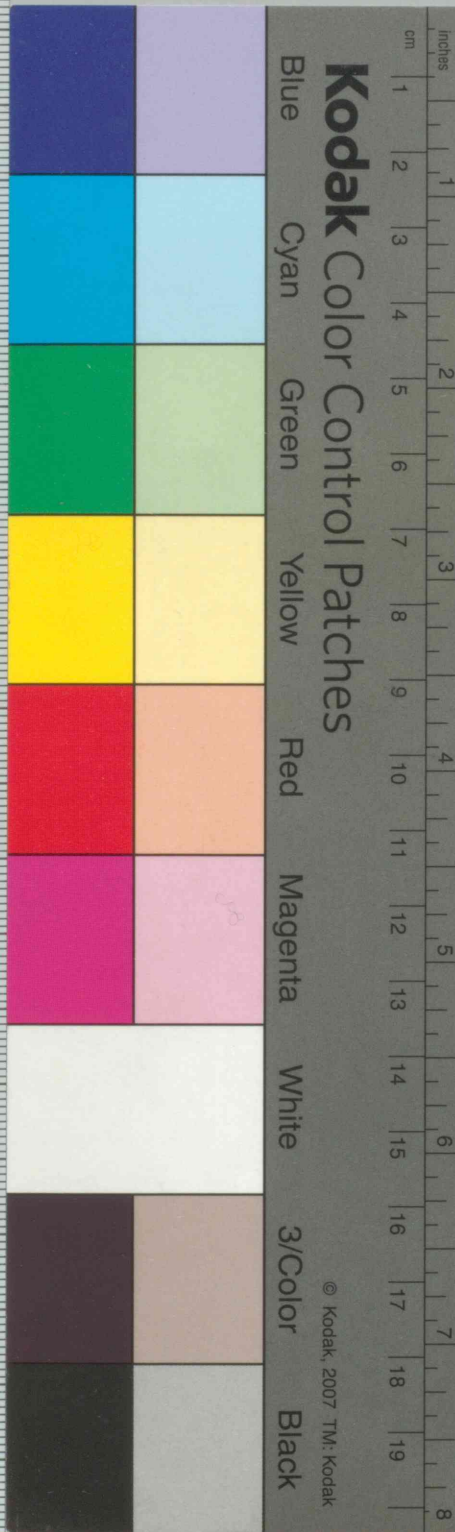
国語六年生
上



学校図書株式会社発行

小KC
G16
R

教科
34
013



60376
教科書文庫
6
810
34-1950
01308
79673

825
1990



寄 贈

教科書文庫

6

810

34-1950

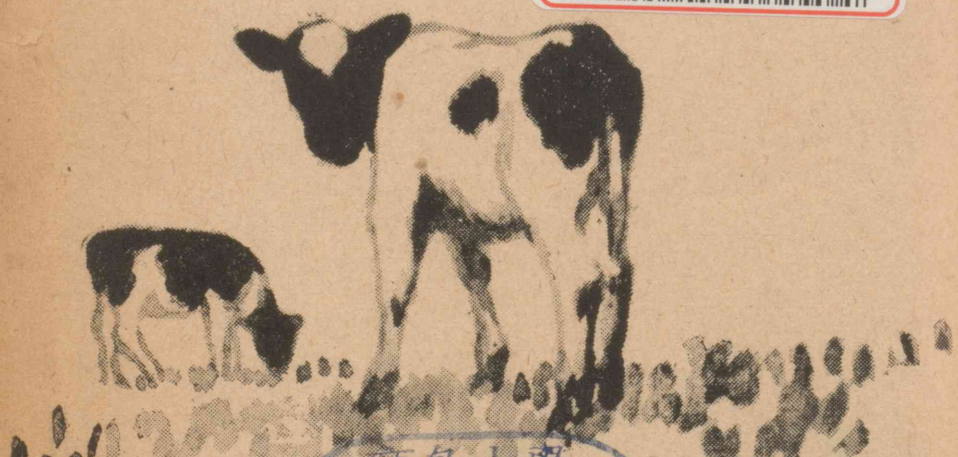
0130449673

中央図書館

国語六年生
上

広島大学図書

0130449673



広島大学
教育学部図書

学校図書株式会社

広島大学図書

0130449673



目 録

(一) 立ちあがるすがた

一 つちの音

二 心のつえ

三 二つの柱

20 9 4

(二) 初夏

一 あゆ

二 野道を行く

三 初夏と子供

37 33 28

(三) ラジオ

一 音というもの

二 ラジオと言葉

三 北米かいたく者

57 50 47

(四) なぞをとく

一 水の色空の色

74

(五) 学校自治会

二 電車の中

三 なぞをとく喜び

88 80

一 心の花

二 学校自治会

三 人と人のつながり

112 101 94

(六) 野口英世

一 いろいろに落ちる

二 決心

三 立志

四 はげしい勉強

五 いろいろの研究

六 その死

138 133 129 125 119 116

お仕事の手引
新しく出た言葉
漢字

158 152 143



(一) 立ちあがるすがた

一つちの音

夜が明けた。

町々に太陽が照る。

建物の間から青空がのぞく。

草も木も、そして人も、

むつくりと起きあがって、

静かに朝の空気をすう。

向こうから、汽車のきてきが聞こえる。
こっちから、電車の音が聞こえる。

やがて――

ガラコロと荷車の音がひびき、

にまめ売りのチャルメラがなると、

町々は急に生き生きとしてくる。

工場のサイレンが、

朝もやの中へひろがっていく。

自動車が、

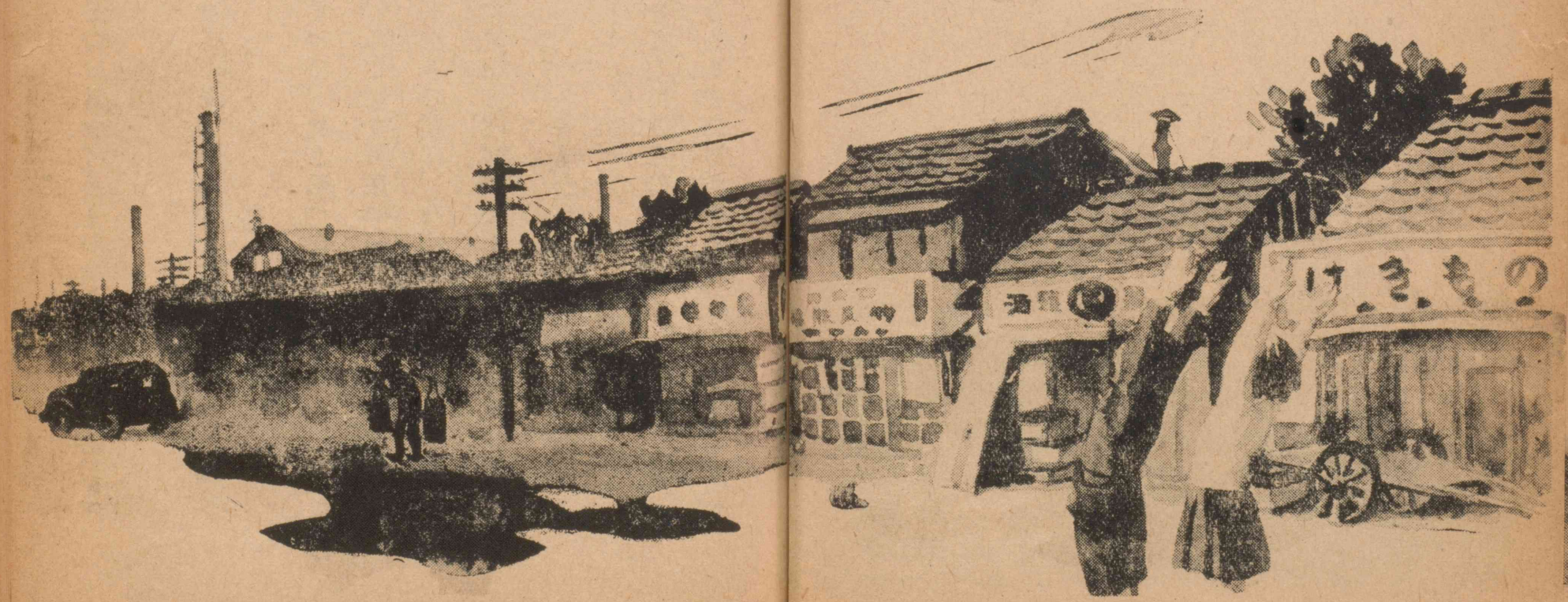
新しいにおいを残して走って行く。

カーン、カーン、カーン。

たくましいつちの音に、

人々の思いが、

はつきりと感じられる。



麦が青々とのびている畑。ゆらゆらとのぼるかげろうの向こうに、もんしろ
ちよりの飛んでいるのが見えます。

木という木は、みんな芽をふくらませて、その赤みがかった色は、少しぬれ
ているようです。

何もかもが、春の光をむねいっぱいすって、生き返ったのです。

あたり一面、すっかりたがやされて、みごとな野菜畑になっています。子供
たちがよく、「高い高い」をして遊ぶ石がきの間に、たんぼの花が二つ三つ、
顔をのぞかせています。たった一本ぽつんと、とり残されたかしの木のえだが、
おもいおもいのすがたでせのびをしています。

虫けらも、名もない道の小草も、

ふぶきにたえ、あらしにも負けずに冬をこしてきたのです。

そうして、今、その苦しみを味わってきたものだけが知る喜びを、声高らかに

うたい、思いきりおどりまわっているのです。

広場のあちらこちらには、新しい材木が、うず高く積まれています。その間
を元気のいいわかものが、行ったり来たりしています。

カーン、カーン、カーン。ゴシユ、ゴシユ、ゴシユ。

つちの音、板を切るのこぎりの音があたりの空気を破って、力強くひびいて
いきます。

柱が組まれ、むねがあげられます。わかもの額にあせがにじみ、ひきしま
った顔に喜びがあふれています。

「おうい、お茶が出たよー」。

「ちよいと、これだけかたずけてからいくよー」。

こう答えて仕事を続けていたわかものは、しばらくすると、

「どれ、ひと休みしようかな」。

と、柱をつたってするするとおりて来ます。あせをひとふきしたわかもののはすんでかがやいていました。

みんなの前にならべられた、ふかしたてのいもからあがるゆげが、かげろうとなつてあたりにひろがつていきます。

「あと、四五日でできるでしょうかな。」

「なあに、もうすぐですよ。あす、あさつてというところだね。」

「さあ、仕事だ、仕事だ。」

かけ声も勇ましくわかものたちは、はちまきをしめなおして、自分の仕事場へ帰って行きます。と思うと

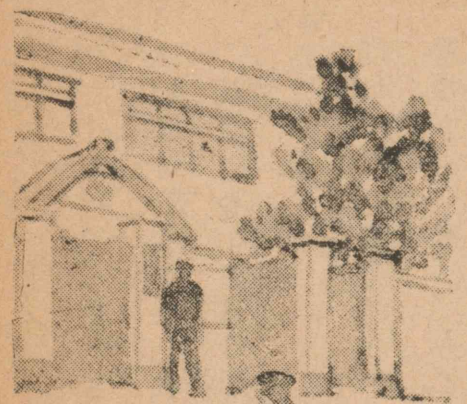
ゴシュ、ゴシュ、ゴシュ。カーン、カーン、カーン。

あの、はらにしみとおるような音が、前よりいつそう高くひびいていきます。

二 心のつえ

たくさんの汽船が、せわしげに出入りしている神戸の港が眼下に見えるおか。そこにあるN校にひとりの学生が入学した。その学生は、やさしそうな

少女に手を引かれ黒めがねをか



のであろう。なんとなくあぶなかしそうな歩き方であつた。

けていた。きつと目が不自由な

何か小さい声で話し合いながら、静かに歩いていくふたりのすがたに、心ある人は強くむねをうたれた。

これは、わかき日の岩橋武夫さんと、その妹しず子さんのきょうだい愛のすがたである。

話は、だいぶ前にさかのぼる。

岩橋さん一家は、もとは何不自由のない幸福な家であった。家は豊かで、ひとりの不平をいうものもなく、楽しい日々が過ぎていった。いつも、明かいわらい声にみちたこの家は、近所の人もうらやむほどであった。

ところが、人間には、いつどんなにして不幸が来るかわからない。幸福が思いがけない時に、とつぜんおとずれるように、不幸もまた人々の気づかない間にやって来る。

岩橋さん一家も、そのとおりであった。

それは、大正の初め世の中をおとずれた不景氣の時である。

今まで、何不自由のなかった岩橋さんの家も、この不景氣に勝つことはできなかった。家の仕事も思うようにはいかず、お金もだんだん少なくなつて、しまいには、その日の生活にもこまるほどの、びんぼうになつてしまった。

悪い時には仕方のないもので、ちよつとしたことから武夫さんが、目の病氣にかかった。はじめはそれほどでないと思つていた病氣は、だんだん重くなつていった。

それでも、家の人たちはなんとかして、武夫さんの目をなおしてあげようと、苦心した。

「あれの目さえよくなれば、またなんとかなる日もあるだろう。どんな無理をしても、医者にかかる費用だけは、不自由させないようにしよう。」

といつて、家中のものがはげまし合い、力をつけ合つてかん病につとめた。

ところが、武夫さんの病気はどうしてもよくなならない。かえってだんだん悪くなるばかりであった。

「この上は、東京の医者にみてもらうよりほかはない。」

というのが、まわりの人々の最後の意見である。しかし、武夫さんの家には、お金もなかったし、東京までついて行って、かん病するものがなかった。

この時、

「わたしがついて行きます。にいさんの目がなおるまで、わたしがにいさんの目のかわりになります。」

と、申し出たのが妹のしず子さんである。

「そんなことを言ったって、おまえが行けるはずはない。」

こういって、みんなはしず子さんの申し出に反対した。

この時、しず子さんは、女学校の二年生であった。女学校の二年生といえは、

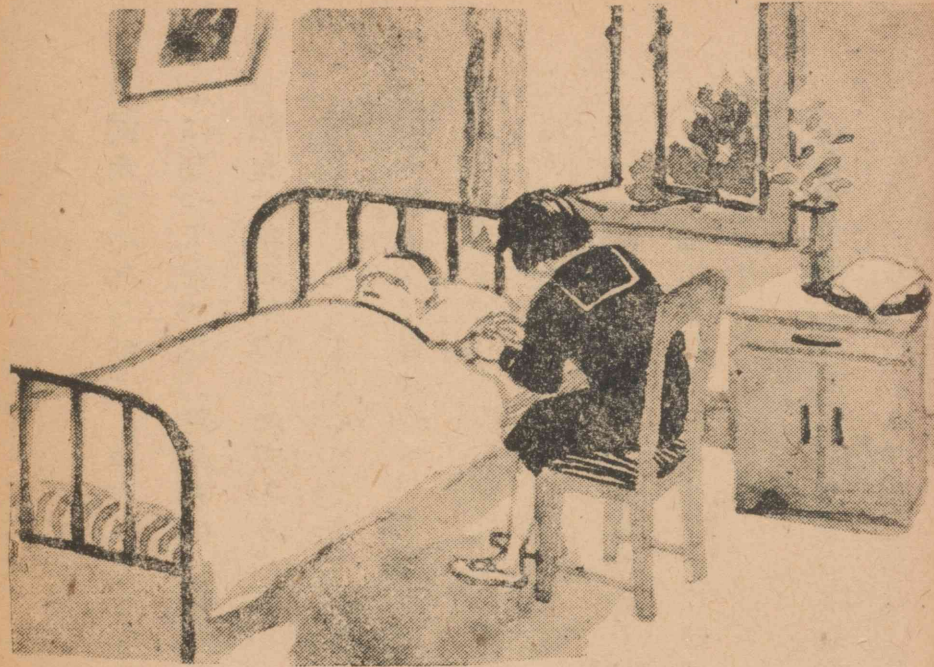
友たちとはしゃぎまわって遊んだり、服の形や色をあれこれと心配する年ごろであるが、にいさんを思うしず子さんは、そんなことを少しも考えなかった。それどころか、自分のすきな学校もやめてしまった。

このしず子さんの熱心に動かされて、家の人も、武夫さんを東京の病院にやることを決心した。

「おにいさん、気をしっかり持つてくださいね。おにいさんの目は、わたしがきつとなおしてあげます。」

「ありがどう。しず子がついていくるので、ぼくはどんなにうれしいか知れない。だが、すまないね。せっかく行っている女学校を、とちゅうでやめさせたりして。」

「何をいうの、おにいさん。わたしがどんなになつたって、おにいさんがよくなつてくだされば、こんなうれしいことはないのよ。」



「にいさん、気を落としてはだめよ。わたしがついていきますから、しっかりして。」
と、力強くはげました。
しかし、いつまで東京にいても仕方がないので、ふたりは大阪の自分の家に帰ることにした。
「目はどうしてもなおらない。」
こういった医者言葉が、ふたりの頭からどうしてもはなれなかった。汽車の中でも、帰るみちみちも、話はとだえがちであった。

こんな話し合いをしながら、ふたりは病院の一室で、かたく手をにぎり合った。
しかし、こんなに心をつくしたしず子さんの努力も、むくいられなかったの
であろうか。医者は、
「お気の毒だが、この目はなおらないかも知れない。」
と、いうのであった。

これを聞いた武夫さんは、世の中がまっくらになったような気がした。
「もう、ぼくはだめだ。どんなことをしても目をあくことができない。二度とおとうさん、おかあさんの顔も見られない。しず子のやさしい手を見ることもできない。いったい、どうしたらいいのだろう。」
と、不自由な目になみだをうかべて、なき悲しんだ。
武夫さんのこうしたすがたを見て、しず子さんは、

武夫さんたちが、まっくらな心をだいて帰って来た岩橋一家は、いよいよ不幸になっていった。だれもが一日中だまっているような日が多かった。昭和六年の年のくれである。

道を歩く人々もなんとなく、いそがしそうな大みそかのぼん、武夫さんは、いつものように自分のへやで考えこんでいた。

「正月が来るというのに、ぼくの家はその用意もできない。それというのも、ぼくの目が悪いからだ。おとうさんやおかあさんに心配ばかりかけている。妹は、ぼくのために学校もやめてしまった。ぼくさえいなければ、みんな少しは幸福になれるだろう。どうせぼくの目は見えるようにならない。——。そうだ——。」

ここまで考えると、武夫さんはふらふらと家を出た。自殺をしようとしたのである。

「何をしています。なんでもいいから生きていておくれ。おまえに死なれて、どこにわたしの生きる道があるのです。」

「にいさん、待って。そればかりは——。どうぞ気持をしつかり持って。わたしは、なぜ学校をやめたのです。それがわからないのですか。」

なきながらいう、母と妹の言葉にはつとして、武夫さんはわれに返った。

「あ、おそろしいことを考えたものだ。」

といて、その場になきふした。

「悪かった。おかあさん、しず子。ぼくはきつと生きるよ。このくらいの苦しみに負けちゃいけないんだね。」

武夫さんは、母と妹の手をとって、強く生きることをちかった。

こうして、武夫さんの新しい第一歩が始まったのである。

「めくらの生きる道は、あんまになるだけではない。いくらでも方法があるは

ずだ。あの名高いギリシャのホーマーもめぐらではなかったか——。
イギリスの詩人ミルトンも、そして、アメリカのヘレン・ケラーも——。
しかも、これらの人はみんな、ふつうの人以上に世のためにつくしているで
はないか。

よし、ぼくも勉強しよう。ね、しず子。たのむよ。」

考へに考えたすえの、武夫さんの決心はかたかった。これを聞いた家の人は、
ほっとした。そして、だれよりも喜んだのは、しず子さんであった。

「ぼくはN校にいこう。あそこでうんと勉強もし、心もすっかりきたえよう。」
「にいさん、それがいいわ。がんばってね。」

ふたりの間には、久しぶりにあかるい気持が流れ合った。

いよいよ学校が始まると、しずさんは雨の日も、風の日も、武夫さんの手
を引いて登校した。いっしょに教室にはいって、むずかしい講義も聞いた。男

の学生の話し合いのなかまいりもした。

家に帰ると、いっしょに復習もした。そればかりではない。武夫さんがねて
しまつてからも、しずさんはいっしょけんめい勉強した。

というのは、武夫さんの勉強を助けていくには、女学校を二年でやめてしま
つたしずさんは、自分も勉強して力をつけなければならなかつたのである。

しずさんのこの苦心は報いられて、武夫さんの勉強は、ぐんぐん進んでい
つた。今は、元気に他の学生にまじつて、仕事をしたり議論したりする武夫さ
んのすがたを見て、しずさんはほっとしたのであった。

日本のいや、世界の岩橋としてうやまわれるようになったうしろに、しず子
さんの力のあつたことを、わすれてはならない。

三 二つの柱

世界中でいちばん小さな国の一つでありながら、世界中でいちばん幸福な国の一つ。

いろいろな産業のおこる条件に欠けているのに、ひどいびんぼう人のいない豊かな国の一つ。

気候風土にもめぐまれない国でありながら、世界一の農業国といわれる国。

それは、デンマークです。このデンマークも、初めからこんな幸福な国だったわけではありません。

それどころか、ほんとうに不幸な国だったのです。その不幸な国が、どうして、こんな幸福になることができたのでしょうか。

話を今から、約八十年前にもどしましょう。

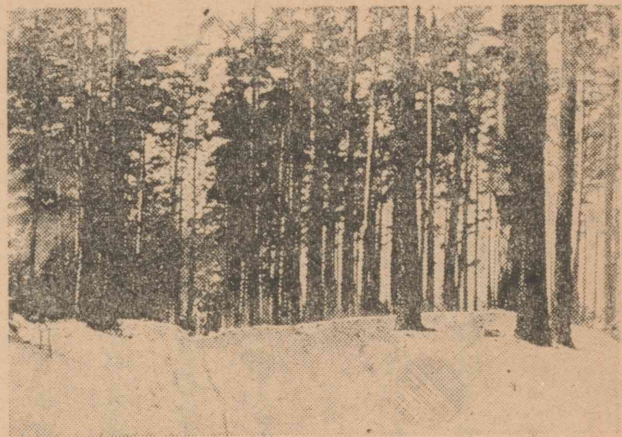
デンマークは、そのころ世界でも強い国といわれていたドイツ、オーストリアの二国と戦いました。そうして、さんざんに破られ、南の方のシュレスウィヒと、ホルスタインの二州を失いました。

この二州は、デンマークにとっては、何よりだいじな土地でした。というのは、ホルスタインといえば、うしの種類にこの名がついているくらいで、うしのよく育つ、豊かなところだったのです。

もともと、あまり豊かな国ではないのに、いちばんよいところを取られてしまったのです。

デンマークの人々は、もう何をする気もなくなっていました。町や家や畑は、だんだんあれはてていきました。

デンマークは、このまま、ほろびてしまうのではないかと、思われるほどでした。この時、



「外に失ったものを、内にとり返そう。」

といて、強く立ちあがったものがありました。

それは、戦場から帰ったばかりのダルガスです。

「われわれは、ユットランドの広いあれ野を、ば

らの花さく美しい花園にしなければならぬ。

われわれは戦いで失ったものを、すきやくわで

取り返すより外に方法はない。」

ダルガスは、こう決心すると、いっしょうけん

めいに、その方法について考え始めました。そこ

で、二つの方法を思いつきました。

一つは、あれ地になんとかして水を通すことであり、他の一つは、そこに木を植えるということでした。

よく調べてみると、このあれ地にも、八百年ほど前には、りつばな森林があり、二百年前までは、かしの林のあったことがわかりました。

ダルガスは、いく人かの農夫たちといっしょになって、みぞをほり、水が流れるようにしました。そうして、あれ野一面にはえているヒーズをかり取って、そこに牧草を作りました。

これは、ダルガスの思いどおりにうまくいきました。今度は、このあれ野に木を植えるのです。

そこで、ダルガスはこのユットランドでも、りつばに育つ木の研究を始めました。その結果、もみの木がいいことを発見しました。

こうして、デンマルクのあれ野は、緑の色にかがやくようになりました。しかし、このもみの木を植えるという仕事も、決してたやすくできたものではありません。

成功するまでには、ダルガスの血の出るような苦心がありました。

なん回失敗してもくじけない強い意志と、たゆまない研究心を持ったダルガスだからこそ、この仕事を成功させることができたのです。

デンマルクが、緑の野となり、世界の農業国となったのは、全くかれの力によるといわなければなりません。

しかし、ここにわすれてはならないことが一つあります。

それは、ダルガスが木を植えるという



仕事を始める前に、人を植えるという大きな仕事をした、グルトンウイーのことです。このグルトンウイーがいなかったら、ダルガスの仕事も、決して成功しなかつただろうとさえいわれています。

学者として、また、宗教家として世界に名高いグルトンウイーは、何事をするのにも、まず人を植えなければならぬと考えたのでした。

そのためには、学校という畑を作ることを決心し、千八百四十四年ごろから今では、世界でも有名になっている国民高等学校をつくりました。

二十年の間、そこで教育された国民があつたからこそ、戦いに敗れた国を平和な道でおこそうとしたダルガスの考えも理解されたのです。

ちよつとみるとなんの関係もないような、グルトンウイーとダルガスの仕事は、こうして深く結びついて、幸福なデンマルクをつくりあげたのです。

グルトンウイーの教育という仕事がなかつたら、ダルガスの大がかりな仕事

は、成功しなかつたであらうし、ダルガスが農業をさかんにしなれば、グルトンウイーの考え方もひろがっていかなかつたであります。

あの有名な詩人ビヨルンソンは、

「デンマルクの農民は、世界のどの国の農民より高い教養を持っている。と、言っています。グルトンウイーの力によつて、デンマルク人が高い教養を身につけていたから、ダルガスのむずかしい仕事もできたのです。」

また、ダルガスによつて国が豊かになつたからこそ、デンマルク人は高い教養を、身につけることもできたのです。

このことは、ガルガスの仕事を熱心に実行したのが国民高等学校を出たものであり、ダルガスの仕事に成功した時に、グルトンウイーの教育の仕事もさかんになつていったといつたことをみても、よくわかることでありましょう。

「神はみずから助くるものを助く」

というのが、グルトンウイーの教育の出発でありましたが、ダルガスもまた、外の国にたよらないで、自分の力で立ち上がろうとしました。

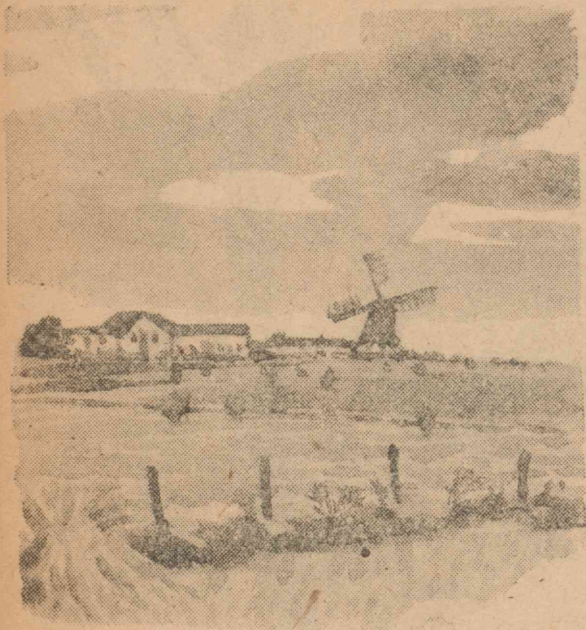
こんなところにも、ふたりの考えの似たところがあつたのです。

こうして、グルトンウイーとダルガスは、ほろびようとするデンマルクを救つた、二つの柱ともいふことができましよう。

人は、どんなむずかしいことになつても、また、どんな苦しみにおちいつても、考え方一つでりっぱに立ちあがることができます。

「心に太陽を持って」

そういうことを、このふたりは、はっきりとわたしたちに教えてくれるのです。





(二) 初夏

一 あゆ

◇ わかば

わかばの林をいくと、
きれいな空気の下で、
なにかおかあさんのおちちに似た、
あまいかおりがして
うれしい。

せいだかのけやきも、
地面をはってるさつきも、

みんなあたらしいやわらかな
あさみどりのわかばになって、
天に向かったのびている。

わかば。

のびる力。

生きているよろこび。

ぼくもいま、

人間のわかばだ。

天に向かったのびるのだ。

◇ あゆ

せなかにほくろのあるあゆが
日のさす静かなせの中にすんでいる。
いく列にもなつて、
やさしいからだを光らしている。

そのかけはすな地に、

かけえのように

大きくなつたり小さくなつたりして、

ときにはぼやけたりする。

水のかげまで玉をつづつて

すな底へおちていく。

小さな物音にさえ

花のようにおどろいては散つて、

また集まるあゆ。

すらりと群をぬいた大きなあゆが、

ときどき群をすべているのか

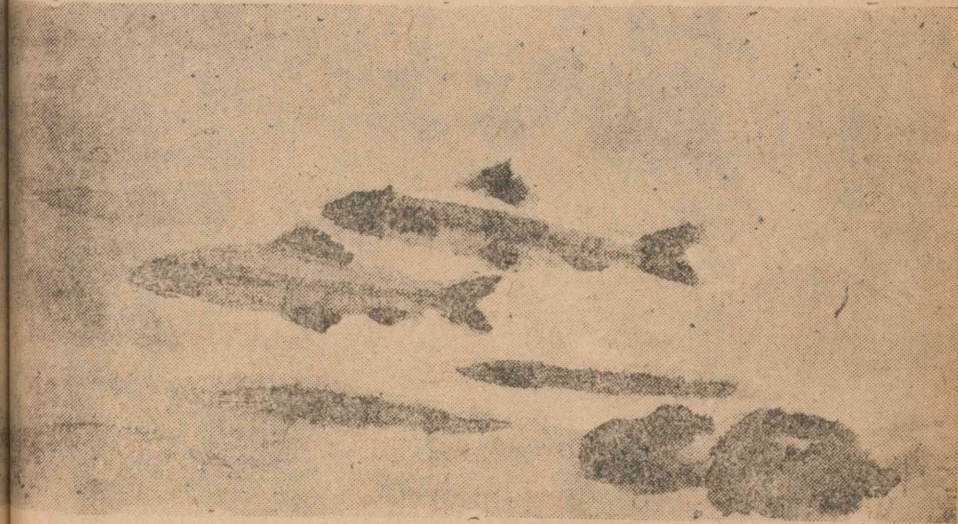
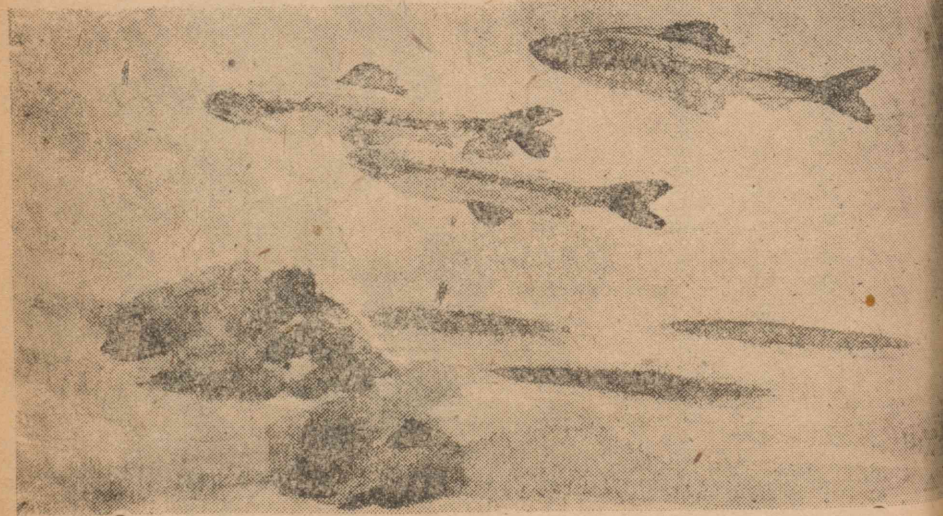
すこしせがしらへでたり、

ほこらしく高く泳いで水面へ

ぱちりとはねくりかえる。

しんとしたはもんがする。

あとは土手の上のわかばのにおいがす
るばかり。



☒ なわしろ

やぐるまに朝風つよきのほりかな

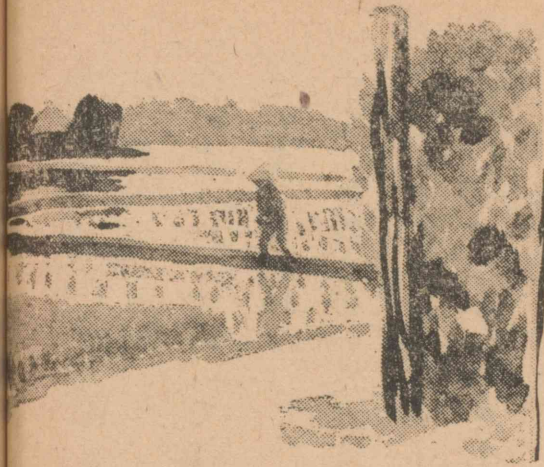
大風やふきしぼられてかしわかば



山門のおうにせまるわかばかな

なわしろの水田にひるの雲動く

かどべなるなわしろ水のすめる朝



二 野道を行く

T 駅で電車をおりた。駅から三四町も行かぬうちに農家がある。わたくしは白くかわいた本通りから、青くしめりをもった野道にはいった。あざやかな木々の緑が、道いっぱいにかげを落としている。

あたりは、一面の麦畑だ。もう、すっかり出そろったほが、南風にゆり動かされている。わたくしは、いぬのようにくんくんと鼻を鳴らして、青麦のにおいをかいた。

畑のすみには、大根の花がさびしくさき残っていた。わたくしはこの花を見ると、いつでもふるさとを思い出す。ふるさとのおさななじみに、あったような気がする。

わたくしは、すっかり村の人になったようなつもりで、

「こんにちは」。

と声をかけて、ある農家の前を通った。

庭先のなえ場には、むらさきがかつたいもなえが、群がりはえている。そのなえを見ていたおばあさんは、かぶっていた手ぬぐいを取って、ていねいにあいさつした。

白いにわとりが、家の中から明かるい地面へ、五六ばかけ出して来る。午前十時の少しあせばんだ、空の色である。

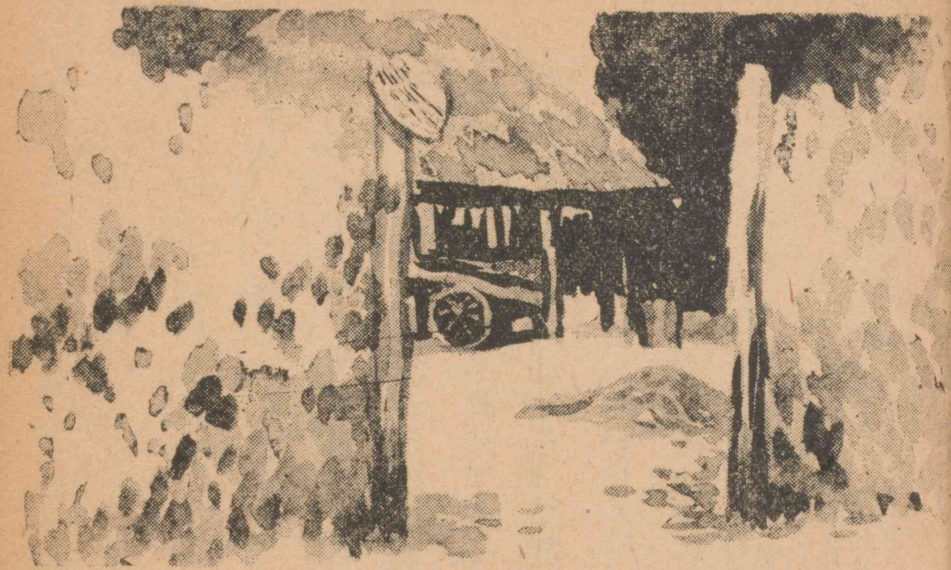
かしのいけがきにそって行くと、こんどは、ある農家のうら口へ出た。そまつなぞう木の柱が二本立っていて、このおくに家のあることを示している。

ぞうきの柱には、あらいたてのざるがかけてある。ざるから水が、ぼとりぼとりしずくを光らせて、おさない野ぶきの上に落ちている。野ぶきの葉は、ゆらりゆらりと軽くゆれている。

わたくしは立ち止まって、そのざると野ぶきの葉とを見ていた。しずくは、三十秒……一分……というように、間をおいて落ち続けていた。

目の細かいざるは、水をすっかりふくんでいるので、ぼとりぼとりとしずくを落とすのである。一つが落ちるとほつとした気持になって、また、その次が待たれる。

ざるのはしに集まった水が、一つのきらきら光る玉となつてくつついたと思う間に、自分の重みをささえきれず、ぼつりと落ちては、ふきの葉にあたってくだけ散る。それを見て



いるわたくし自身も、かすかな光を放って、消えるようにさえ思われる。しかし、そのかすかなおどろきから自分を取りもどして、また、ざるの方へと目を返すと、もう新しいしずくは、光のつぶとなって生まれている。

いつまでいてもきりがないので、わたくしは、あきらめて歩き出した。思いがけない所に、石橋がかけてある。一すじの水の流れが青がしの木もれ日をきらりと反しゃして石橋の下をくぐり、さらに西どなりの農家の竹やぶの中を流れている。その流れにそって行くと、うしのおいが、もうそうやぶの向こうからしてくる。白い前かけをした、わかいじょうぶそうな女の人が、きいろいろやぶのかけでちちをしぼっていた。まだらうして、毛なみがつやつやと光っている。そばには、新しいおけがおかれている。うしと女の人とは、静物のようにおっとりとして静かであった。

三 初夏と子供

「どんな所に、夏が来ているでしょうか。カメラで、一こま一こま、追ってみることにしましょう。」

1. 晴れた空。白い雲。雲のはしが「ギラギラ」かがやいている。ひばりの鳴き声。

2. 一面の麦畑。きばんだ麦が波をうっている。においが風に乗せられて来るようだ。遠くに緑の山波。

3. 麦畑の中を走る白い一本道。すぐそばを小川が流れている。水の流れるかすかな音。

4. 小川の中。太陽がさんさんと水面にかがやいている。流れを切って、かす

かにふるえるあしの葉。

5. カメラ、ななめに小川にそつて移動する。ほがらかな歌声が聞こえて来る。

うの花の

におうかきねに

ほととぎす

早も来鳴きて

しのび音もらす

夏は来ぬ



6. ふたりの男の子、魚取りあみを持って現われる。少しおくれ、バケツを持った女の子。みんな新しい麦わらぼうしをかぶっている。

7. カメラ、三人に近づく。「あつ、いるぞ、いるぞ」。先頭の子供、声をおさえて小川をのぞく。他のふたり、すかさずようにして子供の指さす方を見つ

める。「ふなた」「ふなた」。見合せてわらう、うれしそうな顔。

8. 川の中。もの間でふなのひれがしきりに動く。「パシヤツ」と音をたてて、のびて来たあみが水にはいる。

9. あみの中で、ふながおどっている。きらきら光る白いはら。女の子、バケツをさし出して、ふなを受け取る。

「これで五ひきね。ずいぶん大きいわ」

10. バケツをのぞきこんでいる三人の子供。

11. バケツの中。五ひきのさかなが元気よく泳いでいる。ときどき、バケツの水を、「パシヤツ、パシヤツ」とはねとばす。

12. 三人の子供、次のえものを求めて流れにそつて進む。

「おうーい」。後からよぶ子供の声。みんな、立ち止まってふり向く。

13. 麦畑の中。わらいながらひとりの子供が、魚取りあみとバケツをさし上げ

ている。日に焼けた顔。

14. なかよくかたをならべて、小川の岸を歩いて行く四人の子供。

さ月やみ

ほたるとびかい

くいな鳴き

うの花さきて

さなえうえわたす

夏は来ぬ



明かるい歌声。向こうになわしろが見えてくる。つばめが飛んでいる。

○

1. 木もれ日が「チカチカ」目をさす。

2. あけはなされたまどからさしこむ光が、まわりの白かべに反しやしてかがやいている。白いカーテンが軽くゆれる。

3. 本を読んでいる子供。「野道に行く」を読むほがらかな声が、へやいっばいに聞こえる。

「さあ、勉強がすんだぞ」。大きいのびをして立ちあがる。

4. 手早くあたりをかたずけて、ボールとグローブを取って、ぼうしを左手にへやをとび出す。

5. ドアのしまる、「バター」という明かるい音。

6. 庭の一角。つつじの花がさいている。赤、白、むらさきの花。

7. まつの緑。

8. もえるような木々のわかば。



9. 「いってまいります」。門を出る子供のはじけるような声。

10. 子供の乗った自転車が、町かどを右に曲がって消える。追っかけるようにうしろで子供の声。「おい。みちお君」。



11. 子供、自転車を止めてふり向く。おどろいたような顔。

「やあ、まさお君か。だれかと思ったよ。」

12. 虫取りあみを右手に、まさおが、「バタバタ」近づいて来る。立ち止まって、

「キャッチボールか。ちよつと待ってね。」

まさお、にっこりわらって門の中へ消える。

13. とり残されたみちお、ボールを投げあげては受け、受けては投げあげている。つばめが二わ、ボールをかすめて飛び去る。

14. 電線に止まった二わのつばめ。おがしきりに動く。

15. みちお、つばめを見あげてにっこりわらう。

「チュ、チュ、チュ。チュ、チュ、チュ。おまえはどこから来たの。青葉、わか葉が美しいね。」アナウンスの声。

16. 町のつじ。自動車、自転車、人の群れがいそがしそうに通る。みんな夏物をつけている。

日がさが、「パツ」と明かるい。

17. 人波の中に、自転車を飛ばして行くみちおとまさおが見える。



カメラ、少し上の方から、ななめにふたりを追って進んでいく。にぎやかな町々がつきつきと展開され、正面遠くに緑の森が見えてくる。

18. 公園の入口。「西山公園」と石にほりつけてある。みちおとまさおが、公

園の中へはいっていく。

19. 公園の中。子供たちが遊んでいる。すべりだい、ぶらんこ、おにごっこ。

20. 公園の広場。入り乱れてキャッチボールをしている子供。たまを受ける音が、静かなあたりにこだましている。

21. 自転車からおりたふたりの子供。軽くひたいのあせをふきながらやって来る。にこにこした顔。みちお、手をあげて「おい」と声をかける。



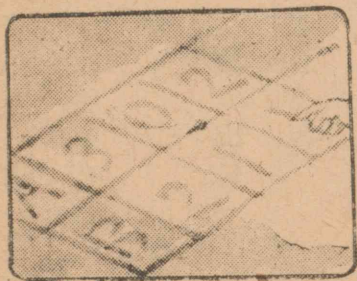
22. 二台の自転車。その上にかけて作っている大きなふじだな。むらさき色のふさふさした花。風に流れるように飛んで来たちようが、自転車のまわりをひらひら飛ぶ。

23. 子供たち、キャッチボールをやめて、ふたりをむかえ入れる。あせばんだ顔、顔、顔。「みんなで野球をしよう。うん、それがいい」。

24. まるくなって組分けをする。「じゃんけんぽん」「じゃんけんぽん」。みんなしんけんな顔。組がきまって、子供たちさつと位置につく。

25. ピッチャー、大きくモーションをかけてたまを投げる。

26. 「カーン」という高い音。空を飛ぶ白いたま。たまを追ふ子供たちのかけが地上を走る。



27. 白くかわいた地面。「Aチーム。三、〇、二。Bチーム。二、一」と、得点表が書かれている。子供の手がのびて来て、Bチームの所に、「一」と書き加える。

28. カメラ、遠のく。子供たちの野球をしている風景。

29. 青い空。白い雲がうかんでいる。風がそよいでいる木のえだ。
 30. 十二時をさしている。公園の時計台。
 31. サイレン。ひるを告げるサイレンの音が鳴りひびく。
 32. 公園の出口。「さようなら」。「さようなら」。他の友だちと別れて帰るみちおとまさお。



さわやかなみどりよ
 ゆたかなみどりよ
 田畑をうずめ
 野山をおおい
 そよぐそよぐ
 わか葉がそよぐ

「わか葉」の歌が、カメラとともに自転車をふむ、ふたりのあとを追う。

(三) ラジオ

一 音というもの

このあいだラジオで、「げき場音楽の話」を聞いた。

その中で、たいこのたたき方によって、いろいろな心持を表わすことができ
 るし、また、さまざまな情景を写し出すこともできるといふ話がおもしろかつ
 た。

その例として、まず、水の音をとりあつかった。水の音をたいこで表わすこ
 となどは、ちよつと考えられないが、実際に聞いてみると、たしかに水の音で
 ある。

初めに、川の水の音をたたいて聞かせてくれた。川波がザワザワと立ちさわ
 ぐところである。次には、雨のふるところであつた。それから、水の中にドブ

ンと飛びこんだ時の音も表わした。おしまいには、海岸で波のくだけるところを聞かせてくれた。ドンドンドドンとなる大だいこの音は、ほんとうにうち寄せる波の音を聞いているようであった。

次に、風の音をたたいた。風といえば、「そよそよ」とか、「ザワザワ」とか、「ビュウビュウ」とかいう言葉で表わしているが、それをたいこで表わすというのだからおもしろい。よく聞いていると、たしかに風の音になる。とうげ道にさしかかった時、さつとふいてくる風であり、竹やぶを流れてくる風であり、町の通りを、電線を、旗を、せんとく物をふいてくる風である。

風の音よりも、もつとおもしろいと思ったのは、雪のふってくるるところを表わしたひびきである。たいこを、低く、細かく続けて打ち鳴らすのであるが、いかにも雪がしんとふりしきっているような気がした。

ただ一つのたいこが、その打ち方によって、水の音にもなり、風の音にもなり、雪のふるようすにもなるのは、不思議である。

しばいで、ゆめを見ていた人が、にわかにも目をさます場面を演ずることがある。こんな時にも、たいこを使う。ゆめからさめる時には、音などは決してするものではないが、やはりたいこをたたく。

音というものは、情景を表わすばかりでなく、心持まで表わすことができるものらしい。

この音というものの効果を、もつともうまく利用しているのがラジオである。



二 ラジオと言葉

人と向かい合って話している時は、相手の表情をながめ、わかりにくい言葉でも表情から意味をくみとることができる。また、相手の口の動きで、言葉の意味がはっきりする。同じ一メートルの間をおいて話している場合でも、相手の顔を見て話す時と、そうでない時とは、わかり方がかなりちがってくる。

自動車の中などで、となり合っている人と話す場合、自動車や町の中の雑音で話が聞き取りにくくても、その人の顔をじつとながめていると、ほとんど全部の意味が取れるものである。ところが、目をつぶるなり、顔をうつむけて相手の話を聞くと、意味は半分以上わからない。これはみなさんが、ためしてみると、すぐにわかることである。だから、これが電話になると、いっそうわかりにくい。言葉がはっきりしていても、相手にまちがって取られる場合が多い。

アナウンサー室に、牧君という人がいた。じ

つに言葉のはっきりした人である。ところが、

この人が電話をかける。相手の人が出て、

「どなたさままでございますか。」

という。そうすると、

「マキです。」

と答える。相手の人は聞き取りにくかったのか、

「はあ。どなたさまですか。」

と、聞き返す。聞き返されて牧君は、

「マキだ。」

と答える。相手は、

「ああ、マキダさんですか。」という。



「マキダじゃないよ。ただ、マキだよ。」

と、声をあらだてて返答する。すると、相手の人はあわてて、

「ああ、失礼しました。タダマキさんですか。」

というのである。

この牧君の言葉などは、聞いていると、じつにはつきりしているのだが、
こういうまちがいが起こる。多くの人を相手にしているラジオの話し方がむず
かしいのは、無理がない。

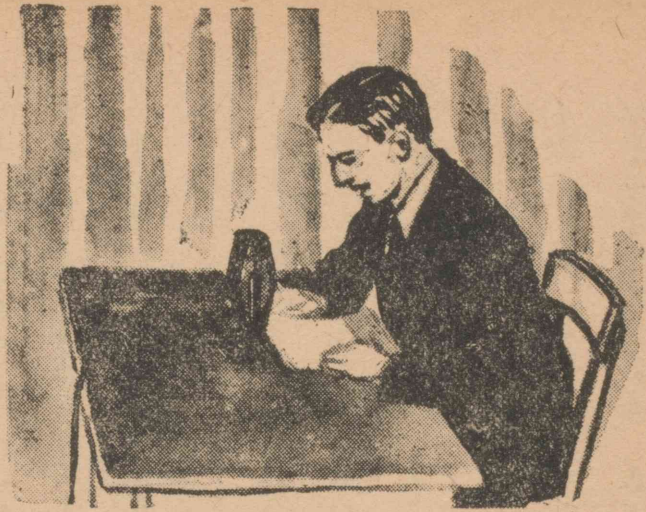
ラジオの話し方は、つねにすぐれているものばかりではない。ラジオができ
てから、まだ間もないということも、一つの原因だが、もう一つは、大勢の人
の前で、自分の考えや気持を言葉で話すということとは、とくべつの技術で、多
くの練習や訓練を必要とするためである。

いったい、日本人は、音読することが少ないようであるが、少年のころから
学校でも家庭でも、音読の機会を多くして、よくこれになれるようにしたいも
のである。

ろう読でなく、なんんかの人が集まって、みんなでうまく話し合っている場
面は、どこでも見ることができ。が、いったん、みんなの前でたくさんの
人を相手に、ひとりの人が一つの考えを話すことになる、まずこれはといっ
たものは少ない。

夕食のあとなどで、家族がひとところに集まり、ピアノに合わせて子供が歌
をうたう。母は、その国のすぐれた詩をろう読する。だんろを囲んで楽しく夜
が過ごされていくというようなことが、いっぱんに行われるようになってしま
うにけっこうであるが、これはまだあまり見かけられないことである。

次に、正しい発声法が教えられ、同時に、必ず正しい話し方をも教えられね
ばならないのである。たとえば、「白いいぬが歩いて来ました」という言葉を、



「シ・ロ・イ・イ・ヌ・ガ・アル・イ・テ・キ・マ・シ・タ。」という。発音は、たしかにシの字も、ロの字も、イの字も、それぞれシとして、ロとして、またイとしては、りっぱな発音であるかも知れない。しかし、「白いいぬが歩いて来ました。」という場合には、わたくしたちは、いちいちシの字、ロの字をはっきりとその音どおりに発音しているのでしょうか。一つの言葉として、「白いいぬが歩いて来ました。」という場合には、言葉ぜんたいとしての調子があると思う。

話し方がりっぱに育っていない日本に、にわかにはラジオが生まれたのだから、話す方も聞く方も、とまどいしているということができよう。りっぱな話し方は、これから生まれるのではあるまいか。

「話のうまい。」ということとは、わかりやすくいつてみると、言葉がはっきりしているということ、これがちばんの条件である。どんな美しい声をしていようと、また、正しい標準語を話そうと、ひとことひとことが、はっきりわからなければ、なんにもならないのである。

次に、「間」ということである。「間」がじょうずに考えられた話し方、これが一つの条件なのである。ところが、この「間」をいかすことはじつにむずかしいもので、よほど話すことになれた人でも、これをりっぱに使い分けることはむずかしい。

さらに、アクセントとなまりの問題がある。これは正しいアクセントでなまりのない、標準語を話すにこしたことはない。その方がすなおにわかりやすく聞き取ることができるからである。

しかし、さらにラジオの話し方のむずかしさの大きな原因がある。それは、話し言葉と書き言葉とのちがいである。

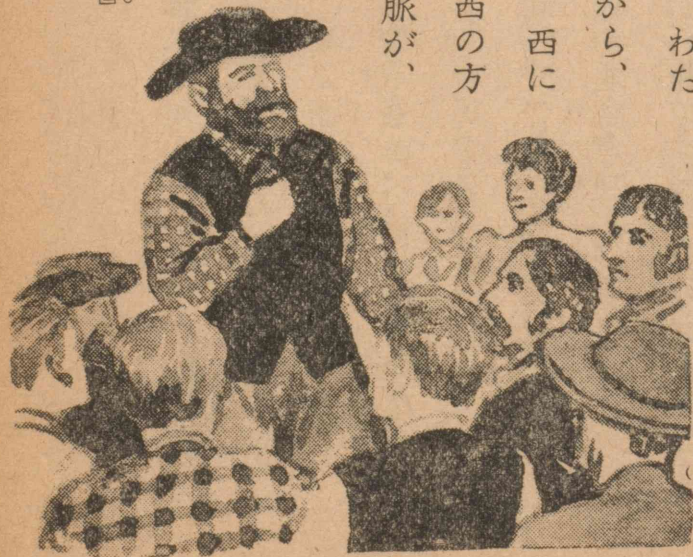
書かれた文章である場合、わたくしたちは、文章を読んで作者の考えをゆっくりと判断することができる。が、ラジオではどんどん話が進み、そんなことをしている、相手の考えはわからなくなってしまふ。このちがいが、ラジオの話し方のむずかしさを物語っているといえるのではないだろうか。

そこで、耳で聞いてわかる言葉を使うということが、話し方の根本の条件になる。耳で聞いてわかるためには、話す言葉にも、話し方にもいろいろのくふうがあることは、いうまでもない。

三 北米かいたく者

音楽始まる。音楽消えて、人々のさわぎ声、しばらく続く。

老人「みなさん、静かに、静かに聞いてください。わたくしたちは、この人のあふれるシカゴの町から、いまいちど、新天地かいたくの心をもって、西に目を向けてみたいと思います。みなさん、西の方には、まだたんけんされない広い原野、山脈が、手をひろげて待っているのです。わたくしがここで、声を大きくしていいたいことは、『わか者よ、おそれるな』ということであり、『わか者よ、西へ行こう』



ということでありませう。

人々のさわぎひとしきり大きく。続いて行進曲、大きく始まる。それから人々のさわぎを消し、一分間ほど続いて終る。馬車のラツパ、そして走る音。ハーモニカ、馬車の上のトムがふいている。

父 (思い出したように) 『わか者よ。西へ行こう。……か、いい合言葉だ。』

母 「ここはどのあたりですの。」

父 「もうじき、オマハという町に出るだろう。聞いてごらん。トムがじょうずにハーモニカをふいている。トムはあの曲がすきだなあ。」

母 (しばらくハーモニカを聞いて) 「ずいぶん長い旅ですね。シカゴを出てからなん日になりました。」

父 「きょうで二十二日目だ。ごらん、このあたりの広い原を。」

母 「今夜あたり、みんなにおいつくとよいですが。うまが弱ったために、

わたしたちだけおくれってしまったて、ざんねんです。」

父 「大じょうぶだよ。車のあとがはっきりしているし、じきにおいつくだろう。この大平原には、インデアンが住んでいると聞いたが、人っ子ひとりいないね。」

メリー「西部に行くほろ馬車が、このへんを通るようになってから、インデアンはどこかに、にげていったのではないでしょうか。」

母 「そうかもしれませんね。ほら、ところどころにとうもろこしがはえていて、種をおろしたのです。」

父 「そうだ。インデアンは野で野じゆうをとり、川で魚をとって食べるが、畑を作ることは、あまりしないのだ。ただ木を切って、あなをあけ、そこにとうもろこしの種子を落として、みのるのを待っているだけなのだよ。」

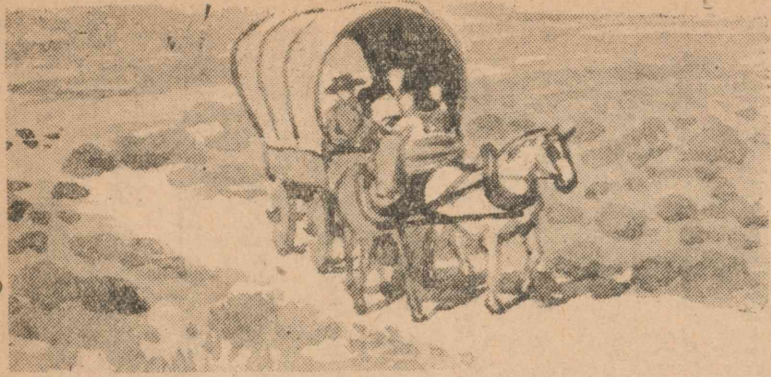
トム(ハーモニカをやめて) 「へえ、おかしな人たちだな。けものや魚がいなくなったらどうするの。」

父 「食料がなくなると、他の地方に移っていくのだよ。しかし、インデアンドいっても、たくさんちがった種族があつて、南部ではかぼちゃやひまわり・まめ・じゃがいも・メロンなども作っていたものもあるんだよ。」

母 「そうですね。むかし、スペイン人からじゃがいもや綿などを作るのを習ったのですね。男の人たちはりょうに出で女が畑を作っていたのですよ。」

父 「そうだよ。コロンブスがアメリカを発見するまで、世界の人たちはインデアンについても何も知らなかったのだよ。コロンブスがインデアンをヨーロッパにつれていって『ひふの赤い人』がいるといつて、びっくりしたのだよ。」

母 「インデアンはわたしたちにいろいろのことを教えてくれましたね。わたし



したちの生活になくはならない毛皮や皮類は、いままでみんなインデ

アンから買っていたのですよ。それからメリー、インデアンの作った美しいかごを知っているでしょう。」

メリー「あ、そうそう。たばこも。」

父 「かんじんなことを、わすれられてはこまるねえ。」

みんな大わらい。ハーモニカを、トムがふき始める。馬車の音が続く。

父 「コロンブスの話が出たが、コロンブスはね、オレンジがまるいと同じように、地球もまるいということを実証しようとしたのだ。そして千四百九十二年、三せきのほまえ船に乗って、西へ西へと航海をしたわけだ。コロンブスのめあては、アメリカを発

見しようという意味ではなく、東洋の国々へ行こうと思ったのだ。ところが、大西洋をわたって、アメリカ大陸のそばにある小さな島々に船を着けてしまった。コロンブスは、これを東洋の島々と思いこみ、西インド諸島という名前をつけてしまった。」

みんなのわらい声。ハーモニカの音やむ。馬車の音、ラツパ大きくひとしきり、雨の音まじる。そしてしばらく続き、だんだん小さくなっていく。

父 「雨がひどくなったね。どうやら、きょうの旅はこのぐらいにしよう。」

雨の音といっしょに音楽が聞こえる。小さく聞こえたり、大きく聞えたりして、おしまいには、だんだん小さくなっていく。

メリー「おとうさん、おとうさんのこれからの考えを話して聞かせてね。」

トム「雨もやみましたよ。ぼく、キャンプの火をうんと燃やしましょう。」

父 「ありがどう。そして、わたくしたちのろえいを、いっそう明かるくして

おくれ。」

メリー「おとうさんは西部へ行ったら、土

地をひらいて小麦をたくさん植え

ようといわれましたね。」

トム「ぼくは牧場の方がいいなあ。なん

千頭といううしを追いまわすのだ。

その方が楽しいよ。」

メリー「おとうさんの考えは。おとうさん

はどちらにして。牧場、それとも小麦畑。」

父 「もちろん、おとうさんは農夫になるつもりだ。けどね、こんなに広い西部に来て、わたしたちが食べるだけのものを作るくらいなら、おとうさんは、わざわざかいたく者になることはないと思うんだよ。」



メリー「それじゃ、どうなさるつもり。」

トム「だって、ぼくたち一家は四人でしょう。それにもし、おとなりのほかの家族が来たとしても、とても、こんな広い土地を耕すことは、むずかしいわけですねえ。」

父「トムのいう通りなんだ。わたしたちの持つて来たすきやかまにしても、小さな土地を耕し、小さな畑をかり取るだけの機械にすぎない。そこで、おとうさんは、この馬車の旅の間いろいろと考え、すきやかまをどう改良したらいいか考えていたのだよ。」

メリー「おとうさん、それで、おとうさんはよい考えがうかびましたの。」

父「ううん、まだ、だめだ。もう少し実際について材料を使って、研究してみなければならぬ。けれど、少ない人数で広い土地を耕す方法を考えなければならぬということ、わかつているね。」

音楽がやむ。

母「さあ、お待ちどうさま。どうもろこしの粉でこしらえた、おいしいむしパンを作りましたよ。コーヒといっしょにめしあがりなさいな。」

トム「ありがとう。いまね、ぼくたち、おとうさんの新しい農具の話聞いていたんですよ。」

メリー「種をまくにも、とり入れるのにもうまを使い、道具の力をかりて、ひとりでもって、十人分も二十人分の仕事を仕上げてしまう方法なのよ。」

母「まあ、それはいいお考えね。」

トム「うまや道具を使うなら、ぼくは、うしをかうよりも、そんな農夫の方がすき。」



「だなあ。」

メリー「そうでしょう。トム、やっぱり、りっぱな農場をつくることね。」

トム「うん。」

母「さあ、それではあたたかいうちにおあがり。」

父「ねえ、どうだ。わたしはこうしてみんながそろって、なかよく未開の地に向かつて、しかも、未来のゆめに心をおどらせながら旅してるのを考えると、わたしたちの遠い祖先が、広い大西洋を横断して行った時の気持が、よくわかるような気がするよ。」

波の音、ほまえ船の走る音が始まり、しばらく続いてやむ。ハーモニカ、例のトムのふく曲始まる。馬車の音、ラツパの音続く。

母「だいぶあつくなってきましたわね。」

父「うん、メリーのようすはどうだい。」

母「氣候になれないせいでしょう。けさ起きた時から、少し熱があるのよ。」

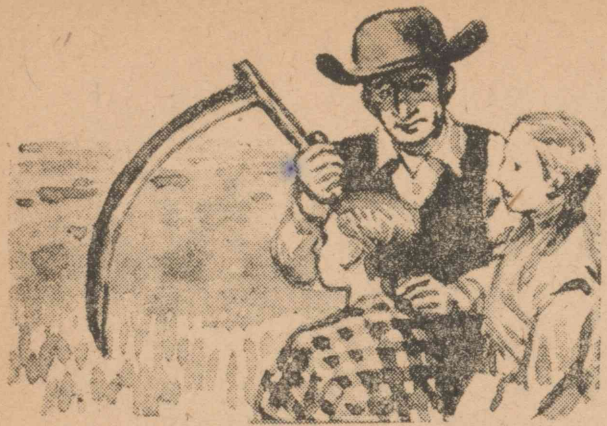
父「それでは、だいじにみてやっておくれ。旅はまだ長いんだからね。」

母「でも、オマハの町には、いつ着くのですか。」

父「うん、それがね。まだまださうとう遠いようだね。しかし、これからまっすぐ西へ西へと進めば、土地のこえた大草原に出るのはわかっている。二、三日旅を続けて、ひとつおちつくことを考えることだね。」

母「でも、わたしたちといっしょに出発した人たちを、さがさなくてよいでしょうか。」

父「そんな必要はない。どうだろう、わたしは氣候からいっても、草原のよいうすからいっても、このあたりがいちばん、小麦を作るのにいいと思うのだが。こんど、オマハに着いたら、土地の人にようすを聞き、よい場所を見つけて、わたしたちの理想の土地を、かいたくしようと思うのだが。」



母 「それがいいですわ。わたし、早く新しい土地に行つて、そこにおちつきたいと思いますわ。」

父 「それは、おまえばかりの気持ではない。わたしたちはかいたく者だから、早く人の住まない土地を選んで、土地をひらきたいと思つてゐるよ。」

解説 トムとメリーの一家は、長い西への旅を終えて、やっと、めあての土地に着き、いよいよレッド川のほとりにまるた小家を建てて、人の住まない広い原野をかいたくし始めました。北米でも、このあたりは小麦を作るのにたいへんつごうがいいので、この自然にめぐまれた上に、機械をくふうして多くの生産物をあげることが、かいたく者たちの使命だったのです。

音楽やむ。ハーモニカ、トムのふくいつもの曲、しばらく聞こえる。

父 「トム、メリー、ちよつと来てごらん。できたよ。すばらしい大きなかまをくふうしたよ。見てごらん。」

トム(ハーモニカをふくのをやめて) 「ほんとう、おとうさん。」

父 「ほらこれだ。うまを使うかりとり機が手に入るまでは、なにかまに合わせるものがなければならぬからね。」

トム(うなづくように) 「うーん。」

メリー「おとうさんの苦心の作がみごとに成功したのね。」

トム「そのかまなら、小麦のとり入れも少しは早くなるんですね。」

父 「うん、少しどころか、麦の成長におくれるようなことはない。なにしろ、小麦のほは、ちよつどみのつた時に、すばやくかりこんでしまわないとだめなものだからねえ。」

トム「ところがおとうさん。そんな大きなかまを使うとなると、人間ひとりの力じゃ重すぎて、ほねがおれはしませんか。」

父 「そりゃ、ほねはおれるだろうよ。しかし、わたしたちの仕事は、力をおしんではいけない。かいたく者は元気で大いに働くことだ。」

トム「けどね、おとうさん。そのかりとり機を、人間の力でなく、もし、うまの力を使ってやることにすれば、どうでしょう。」

父 「もちろん、それにこした方法はないと思うよ。うまの方が人間よりも力は強いし、また、なかなかつかれないからなあ。」

トム「おとうさん、それじゃ、この絵を見てください。ぼくの書いた絵を。」

父 「何、何、絵だつて。うん、これはなかなかすばらしいね。うまを使ったかりとり機だな。トム、おまえはいつたい、いつこんな絵を写しておいたのかい。」

トム「きのうです。ぼくが先週町へ出た時、町かどのかべにはりつけてあったのを、いっしょうけんめいに写し取ってきたのです。絵についている説明まで一字もまちがえずに写しました。この絵をおとうさんにお見せしたら、どんなにお喜びになるだろうと思って、むちゅうで持って帰りました。」

父 「そうか、それはありがとう、トム。」

トム「そしてぼく、おとうさんにすぐお見せしようと思ったのですが、おとうさんが熱心に、そのかまの研究をしておられたので、ついこの絵を出しそびれていたのです。」

父 「そうか、そうか。それじゃ、さっそく、この絵を研究させておくれ。」

トム「おとうさん、ぼくもおとうさんといっしょに研究させてください。ぼくも、その絵のようなものをこしらえたいと思います。」

父

「そうか、そうか。それでは声を出して、説明のところを読んでみるぞ。」

音楽、静かな曲始まり、しばらく続いて、だんだん小さくなる。

父の説明を読む声、読みながらうなずいて言葉をはさむ。

父

「おとうさん、そのかりとり機はどうです。おとうさんの考えたかまと、どちらが便利ですか。」

父

「うん。ずいぶんぐあいがいいぞ。だけどなあ、かり取った麦を台から移すのに、ちよつとめんどうだと思ふよ。」

トム

「あれ、あれ、おとうさん、あんなことを言ったらあ。」

父とメリーのわらい声。

かりとり機の音大きくひとしきり、そしてやむ。

ハーモニカ、トムのふく曲。それが続いて、農夫たちの歌声。その歌の終

りから、かぶせるように工夫のくわの音。くわの音に合わせて、「エンヤ

コーラ」とうたう声。しばらく続いて、汽車の進む音。しばらく工夫の声

を消す。さらに汽車の音を消すように、トムのふくハーモニカがひびく。

解説

高い山脈をこえ、広い原野を横ぎって鉄道がつき、大西洋と太平洋と

が結ばれました。そして、かいたく者の作った小麦などが、その汽車で

運ばれていくようになりました。トム少

年のふいているハーモニカを聞いてくだ

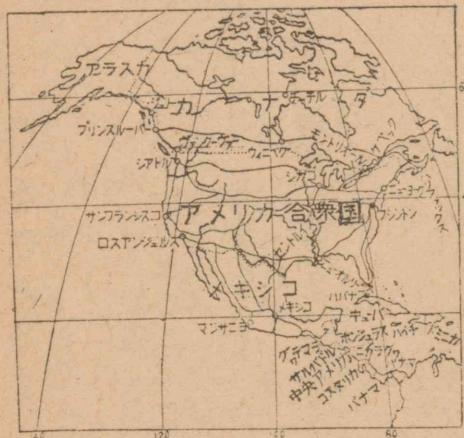
さい。こうした人々のかいたくによつて

新天地はひらかれていったのです。

かいたく者精神は、まことに人類のも

つ、永遠のわかさであります。

ハーモニカ、大きくなる。



北アメリカの略図

(四) なぞをとく

一 水の色 空の色

夏がくると、都会の人もいなかの人も、水に親しみます。子供のころのことを思うと、海辺に育ったわたくしには、夏のくるのが待たれてなりませんでした。

ひろびろとした海、こいあい色にかがやく水の色、なぎさに寄せる波、見ただけでも夏の暑さをわすれさせるが、その中にとびこんで思うぞんぶん泳ぎまわる楽しみは、夏でなくては得られないところです。

泳ぎに行くたびに、不思議に思ったことが一つありました。それは海の色でした。浅いところはそうでもないが、深いところは、どこまでも青々としています。海草のためだろうとも思ってみたが、海草のないところでも青いのです。

いなかに行つて、川ぞいの道をたどる時、あさせを流れる水はすきとおつているが、よんだふちの水は青々としています。海の水といい、川の水といい、青い色をしているのは、どうしたわけでしょう。

理科の本などにはよく、『水は無色とう明』と説明してあります。いどの水、川の水を、たらいやおけに少しばかりくむと、すみきつてなるほど無色とう明です。この水が、青く見えるのは不思議な話です。

みなさんは、太陽の光が赤や青や黄などと、いろいろな色の光のまざつたものであることを知っています。その光が、水の小さなつぶにあたると、おもに青い光だけが、横の方に散らされます。この散らされた光が、目にはいるので、あんなに青く見えるのです。それでは、茶わんに入れた水、コップにくんだ水は、なぜ青く見えないのでしょうか。

水の分量が少ない時でも、青い光をまき散らしてはいますが、それがあんな

り弱いので、人間の目には青い感じを起こさせないのです。一メートルかそれ



紙か、白いさらをおくといつそうはつきりします。

前に、水の小さなつぶといいましたね。このつぶを小さく小さく分けていくと、これ以上は分けられないという、小さな水の玉になります。一ミリメートルのなん百分の一という大きさですから、けんび鏡でなければ見えません。学問の上では、これを分子と名づけています。こんな小さな水の玉が集まって、あの川の水も海の水もできています。この水の玉が、あの青い光を散らす

わけです。それに、海の中には、たくさん細かいごみがまじっていて、これがまた太陽の青い光を散らすので、いつそう青く見えます。

それでは、空の青いのはどういうわけか、という疑問がおこるかも知れませんが、空の青いのも、水の青いのと全く同じです。

わたくしたちが空を見あげた時、太陽の方向からは、光が来て目にはいりませんが、それ以外の方向は、光の通っていく道を横から見ることになるから、何も見えないはずですよ。ところがあのとおり青く見えるのは、その方向から青い光が来るにちがいありません。

みなさんは、「けむりのゆくえ」を読んだでしょう。あの中に、空気中には、目に見えないほど小さいつぶが、さまよっていると書いてありましたね。あんな小さなつぶが、けむりだけでなく、まだたくさんあります。それらのつぶが、太陽の光の中から青い光だけを散らします。それがわたくしたちの目にはいつ

て、青く見えるのです。もし、なん万メートルの上空に登って、小さいつぶのないところまで行くと、太陽の光はほとんど散らされることはありません。したがって、青空はなく、空はまっ黒で、その中に太陽だけが、きらきらとかがやいているだけです。こんな世界は、想像するだけでもこわいようです。空中の小さいつぶのはたらきもまた、いだいなものといわなければなりません。

すみきった青空に、ひとかたまりの白雲がゆうゆうと動いています。あの雲はどうして白く見えるのでしょうか。

雲は、水じょう気の水のつぶからできています。このつぶは、わたくしたちの目から見ると小さいけれども、前にいった水の分子に比べると、ずっと大きいものです。だから、太陽からくる光をそのまま反しゃします。それで白く見えます。波がくだけて白く見えるのも、これと同じ理くつです。その上、水の

つぶの中にはいった光は、全反しゃといって、すっかりはね返ってきますから、いつそう白く光ります。

夕立がいまにもこようとする時の雨雲の色は、前とは全く反対です。いくえにも重なり合ったこい雲は、太陽の光を通そうともせず、みんな向こう側に反しゃしますから、地上から見ると、黒く見えるのです。

地上の景色に比べると、空の景色はつねに変化していきます。青空といっても、春夏秋冬、それぞれちがいます。まして雲の色といたら、千変万化、一日として同じではありません。これらの現われは、みんな大自然のきまりからくるものです。空の色だけでも、まだだれも手をつけないなぞが残されていることでしょう。

二 電車の中

まさおたちは、おじさんと海水浴の帰り道電車に乗った。おりからの夕立て、車内は満員である。まどがしめきつてあるので、むしあつくてあせが流れる。

だれかが、電車の前を横切った。運転手はおどろいて急停車した。とたんに、立っていた人々は、一度に前へしようぎだおしになった。この時、まさおは、げたていやというほどふまれた。ひとりのわかい男が、

「おつとあぶない。ニュートンが発明したものだから、こんなことになる。」

とつぶやいた。

まわりの人々が、思わずどつとわらった。



まさおもみちおも、人々のわらったわけがわからなかった。

「おじさん、ニュートンが発明したというのはなあに。」

「ニュートンが発明したというより、発見したといった方がいい。それは今、電車が走っている時、急に止まっただろう。その時、みんな前にたおれたね。あのだおれるようになるきまり——法則をニュートンが発見したというのだよ。」

「ニュートンが発見しなかったら、電車が急停車しても、たおれない。」

「そんなことはない。ニュートンが発見しなくても、電車が急に止まったら、立っている人はたおれるよ。」

この時、みちおは不思議そうな顔つきでいった。

「ぼくは、電車が急停車したら、立っている人が前にたおれるのは、あたりまえのことだと思ってた。そんなにむずかしいきまりがあるのですか。」

「あるとも。これは中学校へ行ったらよくわかるがね。まあ、かんたんと言
うと、まさをもみちお君も、電車に乗っているの、運動してないよう
に見える。だが、外から見ていると、電車といっしょに走っているのだ。そう
しておまえたちのからだは、電車と同じ速さで、同じ方向に走っていくこと
になる。だから、外から止めるものがなければ、いつまでもこの運動を続け
ていくわけさ。このきまり——法則が一つ。それで、電車が止まっても、お
まえたちのからだの方は、走ることを続けようとするから、前にたおれるの
だ。いま一つは、止まっているものは、外からこれに力を加えなければ、い
つまでも止まっているという性質をもっている。」

「おじさん、変なきまりもあるもんだね。止まっているものが、いつまでもそ
の場所に、いるのはわかるが、走っているものが、同じ速さで運動を続ける
ことになるよ。おかしいよ。ぼくらが、野球でボールを打ったら、そのボー
ルはどこまでもとんで行って、いつでもホームランだよ。」

「そうだ。ところが、そのとんで行くのを、さまたげる力が加わって、地上に
落ちてくるのだ。」

「そのさまたげる力はなあに。」

「それは、地球の引きつける力——引力さ。りんごやなしが、木のえだから落
ちるのもこの力がはたらいているからだ。」

「では、ゴロを打った時、ボールが止まるのは。」

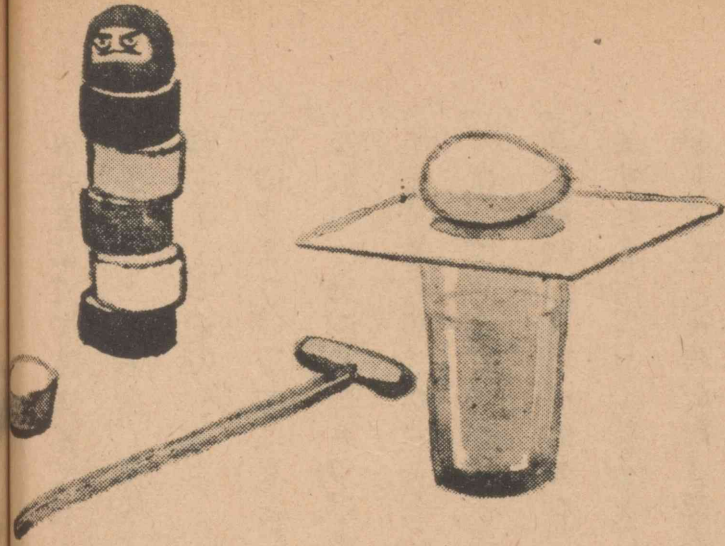
「あの時は、まさつの力がはたらくからだ。ボールがころがって行く時、地面
とすれ合って行くだろう。あの、まさつが、じゃまをするのだ。」

「おじさん、電車が動きたすと、うしろへころがるのは。」

「これは、さつきいった二番目のきまりが現われているのだ。まさおは、わか
ったといったね。説明してごらん。」

「電車に乗った時、みんなのからだは、立っている場所に、いつまでもじっとしてしようとはします。それに、急に電車が動きだすと、からだは、その場所にしようとするのに、足だけが電車といっしょに前へ出るから、からだがあうしろへころがるのです。」

「水を入れたコップの上に、葉書を置いて、その上に、たまごをのせて、葉書を急に、横へ引いてごらん。たまごはきつとコップの中へ落ちるよ。これは、物が、その場所にじつとどまろうとするきまりの現われた。それから、だるま落としのおもちやを持っているだろう。あれも、このきまりを応用したものだ。」



まさおも、みちおも、なるほどとうなずいた。

「おじさん、さつき、げたで足をふまれて大そういたかったが、ぞうりてふまれた時は、それほどいたくはないが、なぜでしょう。」

「これはおもしろい問題だ。そんなにむずかしくはないよ。考えてごらん。」

ふたりは、しばらく考えていたが、みちおは、

「まさお君を、げたでふんだ人が、ぞうりてふむとしても、からだの重さにはかわりはないわけですね」と、いった。

「みちお君は、なかなかいいところに目をつけた。からだの重さは同じでも、いたさはちがうことになる。」

「こうでしょう。おなじ力でふみつけても、面積の小さいげたの方がいたくて、面積の大きいぞうりの方がいたくないのです。」この時、まさおは、

「面積の小さい方がいたくて、大きい方がいたくないわけがわからなくてはだ

めだよ。」と、言葉をはさんだ。

「ああ、わかった。ふみつける力を、六十キログラムの重さとしたら、それだけの力が、げたの時は、せまい面積に加わってくる。ぞうりの場合より、一平方センチメートルに加わる力が、大きいでしょう。それでいいのです。」
「みちおくんの考えたとおりだ。」



といって、おじさんは、次のような話をした。
雪が積もっている時、くつやげたで歩くと、雪の中へめりこんで歩きにくい。スキーやカンジキをはくのは、この理くつを応用したものである。また、重い荷物を、細いひもでさげないで、手ぬぐいやハンカチでさげていくのも、この理くつを応用したのである。
それについて、こんな話がある。

ある時、子供が大ぜいほりばたでボール遊びをしていた。そのほりは、水は少ないがどろの深いところである。そのうちに、ボールがとびこんだので、一人の子供がはいっていった。みるみるうちに、はまってしまつて、あがることができない。見ていた子供たちは、「わあ、わあ」とさわいでいるが、だれひとり助けに行こうとするものがない。助けに行けば、自分もまた、はまってしまふからである。その時、通りかかったひとりのおじさんが、

「はらばいになれ、はらばいになれ。からだを横にしてはって来い。」
とさげた。そのうちに、だれかが、長い竹ざおを持って来たので、はらばいになった子供を、岸に引きよせることができた。そのおじさんが、「はらばいになれ。」といったのは、どういうわけだろうか。

こんなおもしろい話を聞いているうちに、電車は、まさおのおりる停留所についていた。

三 などをとく喜び

みなさんは、お友だちどうしや、また、おうちの人々といっしょになぞかけ遊びをすることがあるだろう。そんな時、なぞがうまくとけて、ちゃんと答えることができたなら、みなさんはきつと得意になり、うれしいにちがいない。

遊びごとのなぞは、もともとその答えがうまくできさえすればよい。ひよつとまちがった答えをしても、かえって愛きょうになつて、おかしいわらいをうむものである。そういうなぞでは、なぞを出したものが、その答えを知っている。ところが、世の中には、だれも答えを知らないようななぞが、非常にたくさんある。そのほんとうの答えは、なんであろうかといつて、すべての人が首をひねっている。これは、遊びごとではない。じつに、まじめな人間の仕事である。もしそれをとくことができたなら、なぞがむずかしかければむずかしいほど、その喜びはまた、すばらしいものである。

今から二千年も前、ギリシヤに、ヒエロという国があつた。ある時王様は、いもの師に命じて黄金のかんむりを作らせようとして、いくらかの黄金をわたした。いもの師は、やがてかんむりを作つて、王様の前に持つて来た。

用心ぶかい王様は、そのかんむりが黄金だけで作られているか、あるいは銀などがまぜてあるかを疑つたので、アルキメデスをよんで、これを調べることをいつけた。アルキメデスは、深い学問のある、かしこい人であつた。王様の命令をかしこまって受けたけれども、さてそれを調べるのに、どうしたらよいかくふうがつかかなかつた。かんむりをこわして調べたらぞうさもないが、せっかく作ったものをこわすわけにもいかなない。これはなかなかむずかしいなぞであつた。

アルキメデスは、このなぞをとくのに、いろいろ苦心した。昼も夜も考え続けたけれども、うまい考えがうかばない。

ある日のことである。公衆浴場に出かけた。湯が湯おけにいっぱいになっている。中にはいろいろとすると、湯があふれだした。からだをしずめるにしたがつて、湯がこぼれていく。立ちあがった時は、湯がずっと少なくなっていた。

この時、急に一つの考えがうかんできた。アルキメデスは、うれしくてうれしくてたまらない。着物をきることもわすれて、はだかのままで、

「わかった、わかった。」

と、大声でさけびながら家へ帰った。

アルキメデスは、かんむりと同じ重さの金のかたまりと、銀のかたまりを作った。別に、水をいっぱい満たした大きなうつわを用意して、まず金のかたまりを、静かにその中に入れると、いく



らかの水がこぼれてた。そこで金のかたまりを取り出すと、水は減っている。

それをもとどおりに、いっぱいにするのに、どれだけの水を増さなければならぬかを量った。それから銀のかたまりで、同じことをしてみたら、金の時より、よけいに水を加えなければ、いっぱいにならないことがわかった。さて、最後に、かんむりを入れて、前と同じことをくりかえして調べた。その結果、水を入れそえるのに、金のかたまりの時よりも多く、銀のかたまりの時より、少ないだけの水が必要であった。このことから、かんむりは、金と銀とをまぜて作ってあることがたしかになったので、この次第を王様に申しあげた。

アルキメデスのといたなぞは、今からみるとそれほどむずかしいものではない。しかし、二千年も前に、このなぞをといただけでも、アルキメデスにとつては、どんなにうれしかったかわからない。しかし、アルキメデスには、それが王様のおほめにあずかることが、うれしかったのではない。かれが学者とし

で、一つの真理を発見したことが、何よりうれしかったのである。かれは一生の間、こういう真理を発見することに、一心になって、当時の人々のまだ知らない、いろいろのことを明きらかにした。

そのころ、となり国のローマの大軍が、ギリシャをおそって来た。ついには、その都であるシラクサのかん落も、目の前にせまった。アルキメデスは、そんな大きなできごとにもよそにして、学問の研究にむちゆうになっていた。すなわち上に図をえがいて、数学の問題をどうとじているところへ、ローマの兵隊がやって来て、かれを引っぱって行こうとした。

「もう少しで、この問題がとけるのだから、それまで待つてくれ。」

といつてきかなかつた。そのため、どうとう殺されてしまった。アルキメデスは自分の命よりも、真理の方をだいに思っていたのである。

学問上のなぞをとくのは、つまり真理を発見することであつて、そういう真

理はたとえひとりのアルキメデスが死んでしまつても、人間の中に永遠に残つて、そしていろいろな役に立つのである。人間にとつて、これほど貴重なたからは無いであろう。だからみなさんがおとなになつて、学問上のなぞを一つでもとくことができたら、それはじつに人間の共有するたからの一つを増すことになる。ただに自分の喜びであるばかりでなく、すべての人々の喜びとなるのである。

むかしから今まで、多くの尊敬すべき学者が、「世界のなぞ」をといてきたが、なぞは、あとからあとから出てきて、つきることがない。みなさんは、学問を学ぶにしたがつて、早くからなぞをとく喜びを経験し、ほんとうに学問を愛する人になつてもらいたいものである。

(五) 学校自治会

一 心の花

大田君は何か不思議そうな顔をして考えこんでいます。いったい、どうした
というのでしょう。川村君が、

「大田君、さつさとそうじをしようや。何か心配ごとでもあるのかい。」
というと、大田君は首をかしげながら、

「そうじゃないんだ。きみは気がつかないの。どうもわからないのだ。」
と、やっぱり不思議そうな顔をしています。

「気がつかないかって、なんのこと。」

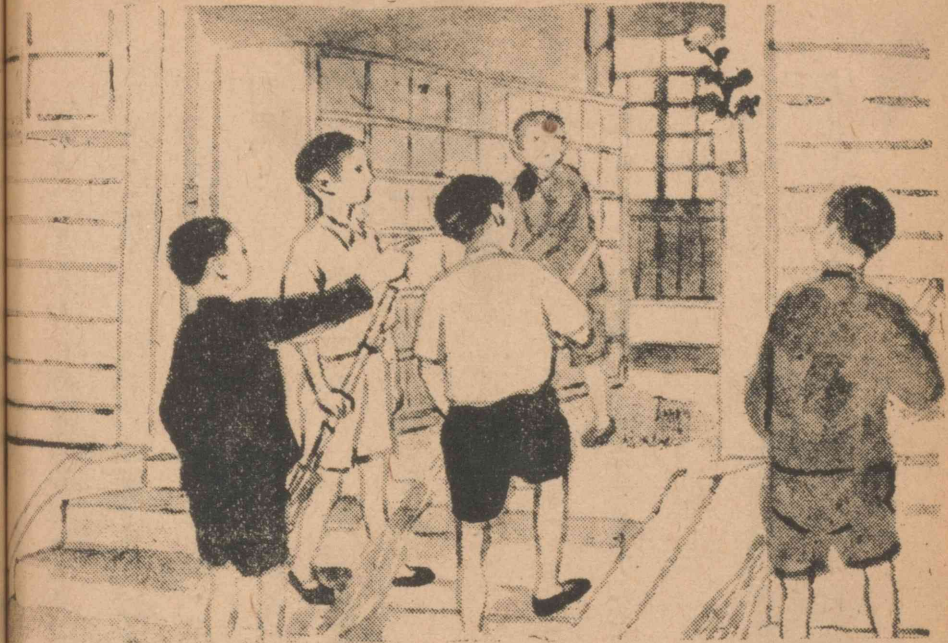
「あそこの入口の所を見てごらん。きれいな花がさしてあるだろう。あれは、
いったれがさしたのだろう。ぼくはそれを考えているんだ。」

なるほど、見ると入口の所に、かわいい花がーりん、かんづめのあきかんを
利用して作った、そまつな花びんにさされています。みんなは、しばらくそう
じをするのもわすれて、その花にみとれていました。

「いつから、あるのだろうね。」

「ぼくも二日ほど前に気がついたんです。小使いさんがしてくれたのかと思っ
て、たずねてみるとちがうというんだ。この間、小さな花たばをだいたいそ
うにかかえて朝早く来た子供があるから、それではなからうかといっているの
だが――。」

みんなは、はじめて大田君が考えこんでいるわけがわかりました。そうして、
みんなもまた、考えこんでいました。



「入口に花をかざる」

これは、なんでもない小さな行いということができましよう。しかし考えてみると心打たれることではないでしょうか。この花を通りがかりに、ふと見つけた人は、

「あ、きれいな花が——」。

と、思つて、心がすがすがしくなるにちがいありません。そういう気持が、みんなの間に伝わった時に、学校はどれほど楽しいものになることでしょうか。みんなが心の中にこの花をえがいて、一日を送る

学校生活は、考えただけでもゆかいてはありませんか。

大田君が、しきりに考えこんでいるのも、これを聞いてみんながまた、考えこんでいるのも、こういうことを思つたからです。

このことがあつて、みんなが気をつけていると、入口の花はいつの間にか、いきいきとした別の新しい花にとりかえられています。

そうして、まもなくこの花のことは、全校のうわさになってきました。

ある日の朝会の時、校長先生が、

「みなさんも気がついていてでしょう。あの入口の所にきれいな花がさしてあります。これは、いつだれがしてくれたものか知りません。しかし、この花はきつとみなさんの心を、美しくしてくれているにちがいありません。」

と、話し出されました。静かに話し続けられる校長先生の声は、だんだん熱をおびてきます。そして最後に、

「これから、わたしたちひとりびとりのむねに、あの花をかがやかせて、学校生活を明かるく、ゆたかなものにしたと思います。」
と、いって、だんをおりられました。

それからの学校は、急に変わってきました。運動場で、ボールの取り合いが起きたりすると、だれからともなく、

「あの花に聞いてみよう。」

と、いい出します。そうするとみんな、はっとして、取り合いをやめるようになりしました。

この花は、それから二、三日ごとにとりかえられていきました。ある時は、はっぱだけのこともありました。ある時は、道ばたにさいている名も知れないような花のこともありました。たとえば、それがどんな花であっても、人々のむねを打つことに変わりはありません。

大田君は、もうどうしても、じつとしていられなくなりました。

「ぼくたちは最上級生だ。何かしなければならぬ。」
と、思うのでした。そうして、川村君たちと相談した結果、運動場をきれいにすることにしました。

毎日、学校がすんでから、半時間ぐらい残って作業をします。まず、運動場のすみの草取りをしました。うら庭のれんがや、石ころのかたづけもしました。すな場のほり返しもしました。

初めは四、五人でやっていたが、しだいにこの作業に加わる人がふえてきました。こうして、運動場はもちろんのこと、学校の周囲はみちがえるほど、きれいになっていきました。

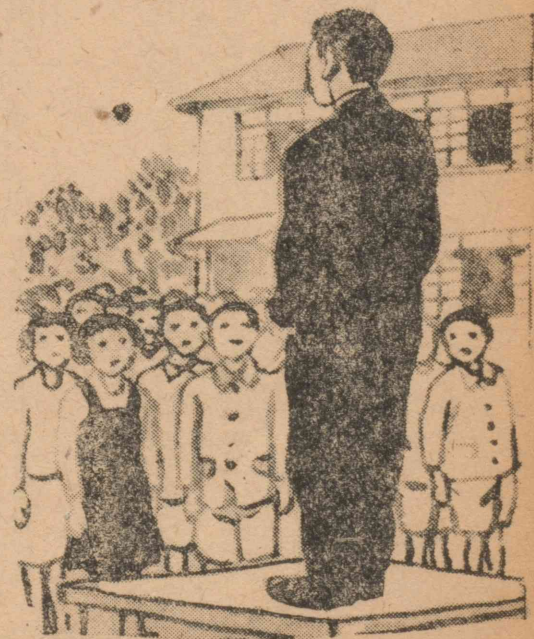
ある組では、ポスターや絵を書いて、ろうかのあるところにはりつけました。また、ある組では、その月の絵ごよみを作って入口にかけました。

みんなの美しい心は、学校のすみずみまで、しみこんでいったということになりましょう。

みんなの前にお立ちになった校長先生は、ほんとうに、みなさんはいい子供です。新しい日本の子供です。あの一つの花から学校がこんなにきれいになりました。

わたしはうれしくてたまりません。わたしがうれしいのはただ、学校がきれいになったからだけではありません。みなさんの心がきれいになったからです。みなさんの心がきれいになったということは、それだけ、日本の心がきれいになったということなのです。

といって、全校生徒のひとりびとりを、やさしい目でじっと見わたされました。



二 学校自治会

○月○日、午後二時から会議室で学校自治会を開きます。各学校の委員の人は出席してください。

話し合うこと 1. 遠足について

2. 学校美化の反省

こんなはり紙が、展示板にはり出されると、学校は急にいきいきとしてきます。そうして、どの組でも委員が中心になって、学級自治会が開かれます。

また、このはり紙と同時に、「みんなの声」と書いたはこが、そなえつけられます。話し合うことがらについて、みんなの気づいたことを書いて、このはこに入れるのです。時には先生がお入れになることもあります。

こうして、学校自治会は学校中の意見をもとにして開かれます。選挙された

議長が中心になって、話し合いを進めていきますが、ほかに記録係などが決められて、話し合いのようすをくわしく書き取っていきます。

議長 これから、学校自治会を始めます。はじめに遠足のことから話し合いましょう。これは五年の今田君が提案した問題ですから、今田君に説明してもらうことにします。

五男 今田 ぼくは、このごろみんなが遠足を待ちこがれているので、この問題を出したのです。遠足はいつやるか、どこへ行くかを決めたいと思います。

議長 何か意見のある人。

あちらこちらから、いっせいに手があがります。

六男 山本 ぼくらの組では白石山に登りたい人が多いようです。

四女 石山 わたしたちは、まだ行ったことのない大谷川の上流に、行ってみたいと思います。

六女 村田 小波村の山おくへ発電所を見に行つてはどうでしょう。

五男 木下 ちよつと質問があります。

議長 どうぞ。今田君が出した問題ですから、今田君に聞いてください。

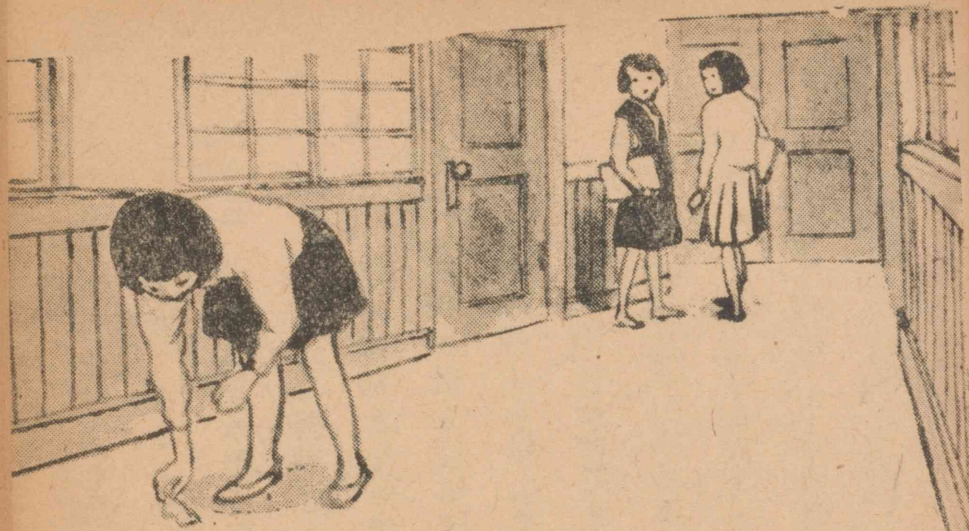
五男 木下 遠足は全校が同じ場所に行くのですか、それとも、学年ごとにちがつてもいいのですか。

五男 今田 そのことも、この自治会で決めたらいいと思います。

四男 大山 ぼくは、みんなの行きたい所がちがうのだから、学年ごとに場所を決めるのがいいと思います。

六男 川原 ふだん、全校がいっしょになって、楽しむということが少ないのですから、遠足はみんな同じ所に行こうじゃないですか。

五女 田中 全校いっしょに行ける所というと、大谷川の上流がいいわけですね。



議長 田中さんから意見が出ていますが、みなさん、どうですか。

賛成、賛成という声が起こり、遠足の場所は、大谷川の上流ということに決まりました。

議長 これで、場所は決まりましたから、こんどは、いつするかを話し合うことにしましょう。

四女 中村 なるべく早い方がいいと思います。

六女 長橋 来週の土曜日ぐらいはどうでしょう。

六男 山本 これは、学校のいろいろな行事と関係のあることですから、ここでは、決められないようです。

五女 田中 そうです。だから、これは文化部の人に任せてはどうでしょう。文化部の方で、先生方とよく相談して決めていただくことにして。

議長 よくわかりました。では、そうします。長橋さん、遠足について決ま

つたことを黒板に書いてください。

長橋さんが、「一、大谷川の上流に行く。二、日は文化部で決める。」と書きます。

議長 こんどは、学校の美化について話し合うことにしましょう。

四男 大山 このごろ学校は、すっかりきれいになりました。

六女 村田 このあいだ、一年生の女の子が、ろうか

に落ちていた紙くずを拾っていました。三年のA組は、みんなて学校の前の道路をそうじしていました。

四女 石山 それは、たいへんいいことですね。

議長

六男
川原

学校がすっかりきれいになったから、これからはいつ見てもきれいな学校であるようにしたいものですね。

五男
今田

ぼくもそう思います。ところどころに、かみくずがすててあるのを見ると、気持が悪くなります。

議長

ほかに何かいい考えはありませんか。

六男
山本

学校の近くでは、どんな所がきたないか話し合ってみよう。

四女
中村

道路のふちは、きたない所がまだまだありますね。朝ばんに通る道ですから、だれでも気がついてははずすのに。

五女
田中

そうです。あの下水をきれいにしたいと思います。

六男
川原

へいやかべのよごれている所が、まだ残っているようです。これなんか、きれいにしようと思えば、すぐできます。

議長

こうして話し合ってみると、きたない所がずいぶんありますね。

四男
大山

まだ、あります。

議長

どんな所ですか、どんどんいってください。

四男
大山

これは、きたないというより、こまることなのですが、道路に大きな石や、れんがのこわれたのがちらばっています。

六女
村田

大山さんは、いいところに気がつきましたね。このあいだ、わたしが急いで道を歩いていたら、石につまづいてころんでしまいました。

四女
中村

けがはしませんでしたか。

六女
村田

運よくけがはしなかったのですが、いたくてひどい目にあいました。それで、あとから通る人がわたしのようになってはと思って、石をのけておきました。

議長

それから町のきたない所をきれいにするには、どうしたらいいでしょうか。

六男 川原 ぼくたちが、近所をまわって、きたない所を知らせてあげることにしてはどうですか。

五男 木下 それはよい考えです。みんなの家の近所をまわるぐらいはなんでもよいことですね。

六女 長橋 みんなが、家に帰った時、家の人や近所の人にいえば、よいのじゃないでしょうか。

六女 村田 おとなの人も気がついていっていると思います。このあいだわたしがごろんだ時も、よそのおばさんが、「ほんとにあぶないことだ。だれかちよつとのけておけば、あんなことはないのに。」と、おっしゃっていました。ほんとに、ちよつとしたことですね。だが、なかなかうまくいかないのです。そこで、どうしましょうか。

六男 山本 ぼくたちの手でしよう。毎日近所へ出かけて行って、きたないところ

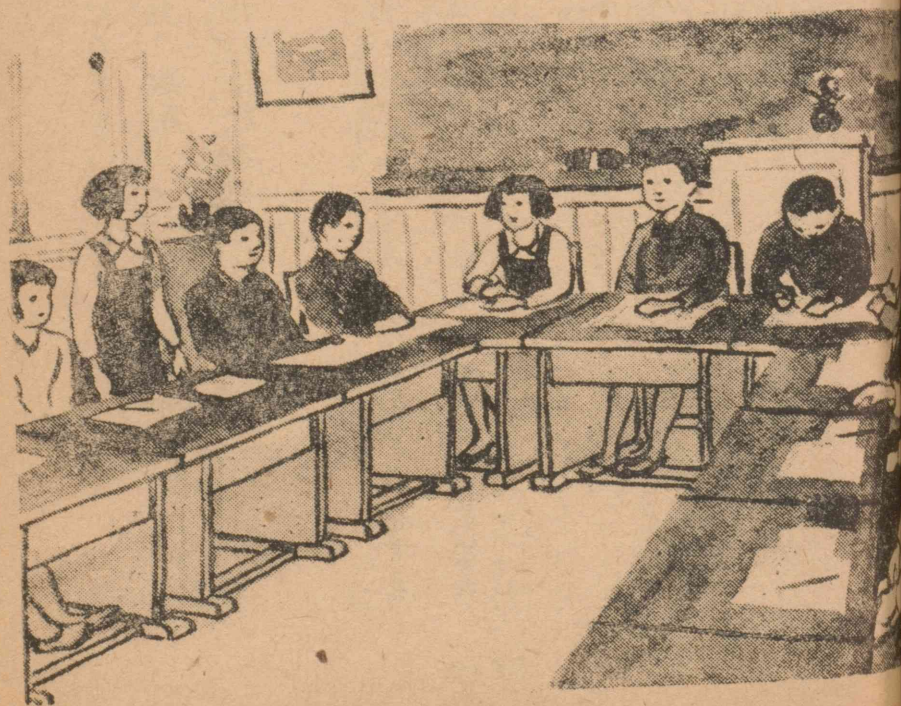
はそうじをするのです。

五男 木下 学校をきれいにしたような調子でこんどは、近所をきれいにしよう。

みんな手を打って、賛成しました。

議長 では、近所をきれいにすること
を自治会で決めることにします。
そこで、どんなにして近所をきれいにするかを話し合ってください。
さい。

六女 長橋 初めにいつするかを決めなければなりませんね。



四女 石山 一度だけでは、なかなかきれいにならないでしょう。

六男 川原 月に二回ぐらいではどうでしょう。毎月、一日と十五日にするようにして、続けていけばだんだんきれいになると思います。

五男 今田 いつもみんなでするのですか。

議長 そのことですが、どんなにしたらいいでしょうか。だれがどこをするかということをお話し合って決めましょう。いつするかということも関係のあることですから。

四男 大山 どの組はどのくいきというように決めてはどうでしょう。

六男 山本 それもいいが、そのくいきの人が自分のくいきをきれいにするという方が何かと都合がいいでしょう。

四男 大山 その方がいいですね。

議長 みなさんはどう思いますか。

五女 田中 山本さんのいうことに賛成です。

議長 では、そういうことに決めましょう。くいきごとにするとして、なん回ぐらいやったらいいかということはどうですか。

六女 村田 川原さんがいったように、月二回がいいと思います。

議長 くいきの組み分けはどうしますか。

六男 川原 これは、どのくいきからなん人来ているかが、はっきりしないとけないから、清潔部の人に決めてもらいましょう。

これには、みんなが賛成して、いよいよ自分たちの手で、近所をきれいにすることにしました。

議長 きょうは、遠足のことと、近所のそうじのことが決まりました。しっかりやることにしましょう。では、自治会はこれで終ります。

三 人と人とのつながり

自分をだいにすると同じように他人を尊重し、自分の自由を主張するとともに、他人の自由をみとめる、——これは今日ではだれもが知っていることで、別にとりたてていうほどのことではない。

しかし、それは知るだけに終ってはならないことで、われわれは、実際に広く行われるような世の中をつくりあげなければならぬ。

おたがいに他人の幸福をきずつけないばかりでなく、むしろ、どうすればおたがいが、それぞれ幸福になれるかを考えて、助け合うような世の中にしたいたとは思いませんか。

人間である以上、だれでも人間としての正しい、美しい心を持っているはずで、そして、だれもが正しい美しい、よりよい生活のできる世の中にしたいたと、考えているにちがいません。人と人との間が、こんなに円満になったら、われわれはどんなにか、明かるい生活をいとなむことができるでしょう。みんなの心がけが正しくて、他人のためになることを考えるような、美しい心の持ち主が多くなればなるほど、世の中はますます明かるくなっていくはずで、す。

それなのに、どうして世の中には、人間どうしのあらしが絶えないのでしょうか。どうしてそういう望ましい人間関係が打ち立てられないのでしょうか。世の中が進むにつれて、おたがいの生活もふくざつになっていきます。こういう世の中にいると、わたしたちは、他人にめいわくをかけなければ、自分だけのことを考えておればよいではないかと思うことがあります。しかし、それでは決してよい世の中にはなりません。なぜでしょう。

これは、大きな問題です。そして、この疑問がとかれなければ、明かるい世

の中を實際に作る方法も見つからないでしよう。

だから、この大きな問題を心にどめて、おとなになっていく間にも、おとなになってからも、いつも考えていかなければならないのです。

ところで、この疑問に答えるために、わたしたちは目を転じて、広い世の中がどんなものであるかを知る必要があります。



ひとりびとりの人間が、かけがえのないねうちを持っていること、その自由と幸福をたいせつにしなればならないことを知っただけのでは、この疑問には答えられないです。

それを知ることが、この大きな

問題に目ざめるいとぐちではあっても、それに対する答ではないからです。

個人主義は、たいせつなことをわたしたちに教えてくれるといわれます。しかし、もしも個人主義が自分だけをたいせつにするものであると考えられるならば、それはあやまりです。個人としての他人をたいせつにすることはもとより、その心がけが広く公共の利益をはかるようにしてこそはじめて、個人主義のたいせつさがわかるのです。

この広大な世の中が、今どういう仕組みでできているか、どんな法則で動いているか、また、その中でひとりびとりの個人がどんなに動いていくのか、それを知らなければなりません。

いいかえれば、世の中の多くの人にかかわりのあることがらを、ひとりひとりの問題とはみないで、これを大きな世の中の問題として、考えていかなければならないのです。

(六) 野口英世

一 いろりに落ちる

火のつくようなはげしいなき声に、おかあさんはあわてて、庭先から家の中
にかけこみました。見ると、つい今まですやすやねむっていた清作が、いろり
に落ちこんで、なき苦しんでいるではありませんか。

「たいへんだ、たいへんだ、清作が——」。

とさげびながら、おかあさんはむちゅうでいろりから引き出して、清作をだき
あげました。かわいそうなことに、やっと三才になったばかりの清作のやわら
かい手は、やけどをしています。医者にかけようにも、近くに医者はありませ
ん。町まで行けばあるにしても、その日にもこまる貪しいくらしては、医者に

みてもらうことさえできなかつたのです。

しかしおかあさんは、自分の一心で必ずなおしてみせると、かたく決心し一
日も早くなおるようと、その日からは夜もねないで、かん病に努めました。
おかあさんの命をかけたかん病で、さしものけがも数十日の後にはすっかりな
おりましたが、左手首から先は、もとどおりになりませんでした。

清作は貪しい上に、さらにこうしたけがという、大きな不幸を負わされたの
です。もちろん、まだ三才の清作には、自分の不幸を感じるだけの力がありま
せん。ただ、だれよりもいちばん苦しんだのは、おかあさんでした。

「なんとかかわいそうなことだろう。この子が大きくなってこの手を見たら、ど
んなに残念に思うことだろう。こんなにびんぼうでなかったら、町の医者に
もかけて、もう少しはなんとかなつたらうに——」。
と、そのみにくい手首を見るにつけてなやむのでした。

しかし、いつまで悲しんでいても何になりましょう。おかあさんは、自分のちよつとした不注意から、この不幸をうんだのだと思うと、これから再びこういうあやまちをくり返さないようにと、じゆうぶんに注意をはらいました。外に出る時には必ず清作をせおい、畑仕事をするにもそばにおいて、ひとときも目から放しませんでした。そうして、たとえ少しでもおかねをため、町のよい医者にかけようと、むちゆうで働きました。

食しい中にも清作は、こうしたあたたかいおかあさんの愛に包まれながら、すすくと大きくなっていきました。しかし戸外で友だちと楽しそうに遊んでいるようすを見ては、

「ああ、あの不自由な手をどうしようか。」

と、おかあさんには行く末のことが気にかかるのでした。また、清作もだんだん大きくなるにつれて、左手が不自由なので、何事をするにも右手よりほかに

使えないことを、子供心にも悲しみました。しかし、おかあさんの細かい心づかいで左手の使えないことが、それほど不自由だと思ふこともありませんでした。

二 決心

やがて、清作は八才の春をむかえ、明治十六年四月、村の小学校へはいりました。

学校へ行って勉強することは何よりもうれしいことでしたが、手が不自由なので、勉強や運動などにこまることがありはしないかと心配をしました。運動などの時、みんなといっしょにできないこともあつたりしたので、清作は、学校へ行くのがだんだんいやになりました。どうかするとおかあさんの目をぬすんで、ぬけ遊びをすることもありました。

ところがおかあさんは、あいつも変わらずわが子のために働いて、毎日つかれ

果てて、おそく帰ってくるのでした。清作はそのすがたを見るにつけ、たとえ少しでもおかあさんの手助けをしようと、毎日どじょうをとっては、村から町へ、家々をたずねて売り歩きました。

やがて、おかあさんはそれを知って、ある夜、油もたえだえのうす暗いランプのもとに、清作をよびつけ、

「おまえは、どうしても、学問で身を立てなければなりません。そのためにおかあさんは、いっしょうけんめい働いているのです。どじょう売りをする時間、どうして本を読んでくれないのです。」

と、なみだながらにいい聞かせました。もとよりおかあさんには、子供心にも自分の手助けをしようとする清作のやさしい心は、うれしいにちがいありませんでした。しかし、どうしても清作に勉強させねばならぬという決心がかたかったのです。

清作は、このごろの自分のなまけがちなことや、おそく帰ってくるのを思うにつけ、こうかいの念でいっぱいでした。

「よしっ、どんなことがあっても勉強するぞ。だれにも負けるものか。」

清作はわれとわが心に、かたくちかつたのでした。それ以来清作は、一日も学校を休むことはありませんでした。時には、いっしょうけんめい読書して、日のくれるのを知らないようなこともありました。

やがて、清作の勉強はどんどん進み、先生をおどろかすほどでした。上級に進むにつれ、

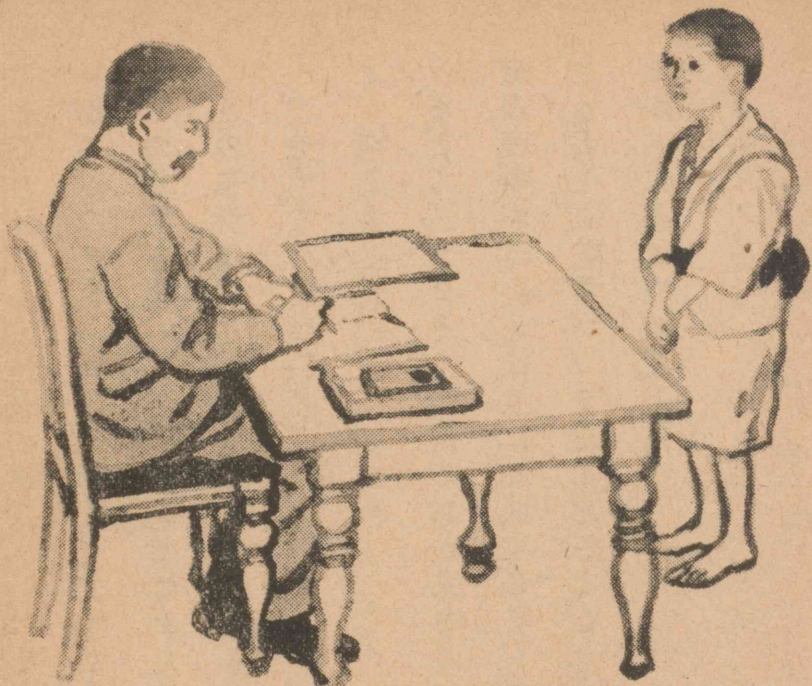


全校のもはん生といわれるようになり、先生に代わって生徒を教えるようにもなりました。

おかあさんも、清作の熱心な勉強ぶりとすばらしい成績を見るにつけ、自分の苦しみなどわすれて、ますます働き続けるのでした。こうして清作は、いよいよ小学校卒業の最後の試験を受けることになりました。

そのころ、小学校は、四年で卒業するのです。卒業試験には、役所から試験官がそれぞれの学校に出張し、試験をすることになっていました。清作が卒業する時の試験官は、猪苗代いなわしろ小学校の小林先生でした。

いよいよ試験が始まって、生徒はひとりずつよび出されていきました。その中に、よれよれの着物こそまとつていいるが、どこことなくおちつきのある、りこうそうな生徒がいました。しかし、たえず左手を気にしつつかくそうとしていいるのが、小林先生の目につきました。小林先生は、つきからつきへと注意深く



たずねましたが、かれはなんのおそれるところもなく、一々はつきりと答えました。その態度といい、成績といい、じつにすばらしいもので、試験官はすつかりあどろいてしまいました。小林先生は、さらにかれが気にしている左手についてそのわけを聞くにつけ、深く同情せずにはおれませんでした。

「そうか。——そしてきみは、ここを卒業してこれからどうするつもりかね。」

「もつともつと勉強したいのですが、

家がびんぼうで上級の学校へいけません。それでおかあさんの手助けをしな
がら、ひまをみつめて勉強しようと思います。」

この言葉を聞いて、小林先生はかたく決心したのでした。

「この子供は、じつにみどころがある。なんとしても勉強のできる方法を考え
てやらなければ。」

と、考えました。

そこで、さつそく清作のおかあさんに会って、学資は自分が心配するから、
ぜひ高等科へいくようにとすすめました。たより少ない親子にとって、これほ
どうれしい言葉が、またとあるでしょうか。ふたりは手を取り合って、なみだ
ながらに喜んだのでした。

三 立志

小林先生にみいだされた清作は、村から二里もはなれた、猪苗代の高等小学
校へ通うことになりました。雨の日も風の日も、時には雪の一メートル以上も
積もった日も通い続けました。ここでも清作の成績は、とびぬけてすばらしい
ものでした。

三年生の時のことです。ある日、小林先生は生徒の作文を読んでいた。

一まい一まい読んでいくうちに、清作の作文が出てきました。それを読んでい
くうちに先生のむねはつまり、目にはなみださえうかんできました。

清作の作文——それは清作が、自分のやけどについてのことを、ありのまま
に書いたものでした。

やがて、この作文はもはん文として発表されました。すると、清作に対する

同情は期せずして集まり、

「清作を救え、清作の手をなおしてやろう。」

という声が、友だち先生方の寄付となって現われました。小林先生はこの金を持つて、若松の渡部先生に、清作の手をみてもらうことにしました。

渡部先生は、このころアメリカから帰られたばかりで、その名は近くの村々にひびきわたっていました。

ある日、清作は大きな喜びと心配をむねに、渡部病院の門をくぐりました。

「なかなかひどいきずだね。しかし、手術をすれば自由に動くようになるでしょう。」

「先生、五本とも動きますか。」

「もちろん、動くでしょう。」

清作の喜びはたどえようありません。手術の結果は、きわめて順調でした。

長い年月がたっているのも、もと通りにはならなかつたが、とにかく使えるようになりました。

清作の喜びは、天にもものぼらんばかりでした。

「よしっ、自分のように不自由な者は、この世にどれくらいいるかしれない。こうした人々を救うために、自分は医学の研究をしよう。」

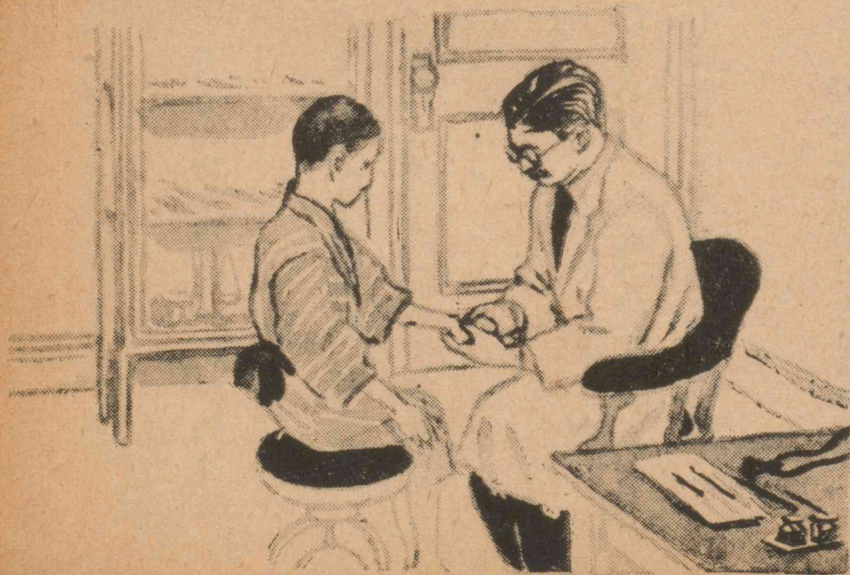
清作はこの時、かたく決心しました。

やがて、月日はゆめのように流れて清作はいよいよ高等小学校を卒業することになりました。

「これからどうする。」

「とにかく、学問で身を立てたいと思います。」

「どんな学問で。」



「医者になりたいと思います。」

「医者になる。それはいい考えた。しかし、医者になるには医学校へいかねばなるまい。」

ここでつきあたるのは、やはりびんぼうでした。もちろん清作には、医学校へいくだけの金はありません。小林先生とても、これ以上清作のために学資を出すよゆうのあらうはずはありませんでした。

「独学でやります。どんなに苦勞してもやりとげます。」

「独学—— それもいい。しかし、医者は独学ではだめだ。実地の研究をしなければならない。それには、りっぱな医者について教えてもらうよりほかに道はない。」

この時小林先生は、ふと清作の手術をしてくれた、渡部先生のことを思い出しました。

「そうだ。あの渡部先生の病院に使ってもらうように、たのんでみたらどうだ。きみ自身でいって、真心こめてたのんでみるがいい。」

「そうします。」

こうして清作は、村から五里ばかりはなれた、渡部病院の書生になりました。

四 はげしい勉強

渡部病院には、数人の書生がいました。しかし、清作ほどみっしり勉強する者はありません。清作はどんなにつかれた日でも、十二時より早くねることはありませんでした。どうかすると、夜明けを告げるどりの声に、おどろいてねるといふありさまでした。

「ナポレオンは、三時間しかねむらなかつた。かれにできる努力が、自分にてきなはずがない。」

清作は、いつもこうしたはげしい意気をもって、ただもうむちゆにはげんだのです。

ある夏、東京の高山歯科学院の血脇先生が、短かい間ではありましたが、若松で歯のしんさつをされたことがありました。血脇先生は渡部先生の友だちで当時の歯科学界では、第一人者でした。

暑い夏の夜、血脇先生はときどき渡部先生をたずね、よもやま話に夜をふかされるのですが、清作はその時血脇先生の目にとまったのです。血脇先生は、いなか病院のこんなわかい書生が、外国語の勉強をしているのにおどろかれました。

「きみはこんなところで、どうして外国語を習ったのだ。」

「はい、独学です。」

「感心だねえ。もし、東京へ来たなら、きつとぼくの所へたずねて来たまえ。」



血脇先生の言葉は深く清作の心に残りました。はげしい勉強にあけくれした、若松での四年はまたたく間に過ぎて、明治二十九年九月、

清作は医師開業試験を受けるために上京し、十月、みごと前期試験に合格しました。続いて後期試験を受けなければなりません。しかし清作には、それまで東京で勉強するだけの学資はありません。そこで血脇先生をたずね、高山歯科学院の小使として、やとってもらうことになりました。こうして苦学一年、明くる年の十月には後期試験に合格し、十一月には一人前の医者として、ある病院に勤めることになりました。ところが、清作の燃えるような研究心は、ただ病人を相手

にしんさつを続けていくだけではあきたりませんでした。

そのころ、さいきん学が新しい科学として、全世界にわたって起こりつつありました。清作はなんとかして、このさいきんを研究してみようと思いました。しかし、びんぼうと取り組んで、わが身のためにいっしょうけんめいに働いているふるさとの母のことを思えば、もうこれ以上無理をいうことはできません。かれは夜となく昼となく、いく日か苦しみなやみましたが、ついに思いあまつて、当時さいきん学研究の第一人者として、名声ならぶ者もない北里博士をたずねて、熱心にその指導を求めました。

「うんと勉強しろ。そして、洋行してみがきをかけるまでになれ。」

北里博士のこの言葉を、しっかりとむねにおさめ、清作は北里研究所の研究員となったのです。間もなく、清作は名を英世とかえました。

五 いろいろな研究

年は移って明治三十二年、英世は二十三才となりました。その年の四月、アメリカのフレキシナー教授が、北里博士をたずねて来られました。その時、英世は接待係をいつけられたので、教授といろいろ話す機会にめぐまれました。「わたくしは、ぜひアメリカへ行って、医学を研究したいと思えます。いかがでしょうか。」

「それはいいお考えです。その時には、お力ぞえをいたしましょう。」

これがもととなって、英世はいよいよアメリカへわたる決心を固めました。

思い立てばどうしてもやりとげねばすまぬのが、英世の天性です。問題の旅費も、血脇先生のお世話でどうにかまとまり、いよいよ洋行することになりました。しかし気にかかるのは、ふるさとのおかあさんのことです。

小林先生が、

「おかあさんのことは、わしが引き受けた。心を残さず行くことだ。」

と、はげましてくださいました。

こうして、その年もくれようとすする明治

三十三年十二月、英世は、はるばる東北の

いななかからかけた恩師小林先生ご夫婦

はじめ、血脇先生や二、三の友人に見送られ、感謝と希望におもてをかがやかせながら、横浜よこはまを出発しました。

太平洋の船旅も大陸の汽車旅も無事に、目的地に着いた英世は、すぐにアメリカで、ただひとり知り人であるフレキシナー教授をたずねました。学資もなく、ただ一回会ったきりの英世がとつぜんたずねて来たこととて、教授はち



よつとおどろきました。が、そのままにもしておけないので、教授は自分の助手として、その研究を手伝わせることにしました。かれはたいへんな努力とにんたいとによつて、つぎつぎとその研究を発表しました。そして明くる年には、教授の勤めている大学の助手になり、かれの存在は次第に知られるようになりました。

その後、明治三十六年十月には、血清研究のためデンマークへ出張し、明くる年の十月アメリカに帰ってからは、フレキシナー教授を中心として新しく開かれた、ロックフェラー医学研究所の助手となりました。

英世のあきることを知らない研究欲は、とどまる所がありません。かれは、いたる所で新しい問題を見つけて研究し、非常な努力をもって、つぎつぎと研究を成し上げていきました。いろいろの研究によつて英世の名は、日一日と全世界に知れわたっていきました。



「ええ、きっと帰って来ます。」
かれは母とのつきぬなごりをおしんで、ふたたびアメリカへわたって行きました。

こうして、研究には子供のようにな熱心な英世も、たえずふるさとの母を思い出しては、一日も早く日本へ帰りたいたいと思いました。しかし、研究のことを思えば、アメリカを去ることはとてもできません。

ある日、かれのもとに一まいの写真が届けられました。わすれもしない母のあまりにも老いたすがたです。この写真が英世に与えたおどろきは、とても大きいものでした。

「家のことは心配するでないぞ。しっかりと勉強して帰れよ。」
と、元気にはげましてくれた母が、こんなに年とったものか。じつと目をとじると、その底からわかい日の母のすがたがうかぶ。はだして寒そうに立っている自分がうかぶ。雪にとじこめられた、なつかしい村がうかんでくる。もう、やもたてもたまらなくなったかれは、さっそく電信局へかけつけ、電報を打ちました。

こうして大正四年九月、英世は十六年ぶりに日本の土をふんだのです。日本の大学は、博士の学位を送ってその功績をほめました。かつては、はだか一かんでアメリカへわたった英世は、今や世界の野口としてむかえられたのです。しかし、こうしている間も研究はかれを待っていました。

「みんなじょうぶなうちに、また、帰って来るんだよ。」

六 その死

アメリカへ帰って英世は、大正七年六月、黄熱病研究のためいよいよエクアドルへ行くことになりました。当時黄熱病は、「か」に関係のあることはわかっていますでしたが、その病原と治療法はわかりませんでした。博士は政府のいいつけを受け、その研究のために出張したのです。

博士はまず、人の血の中から一つの「きん」を発見しました。それはエクアドルへ着いてから九日目のことです。かれはこれにレストスピラという名をつけました。やがて、ただちにめんえき血清をつくり、これを注射すると、「か」にさされても黄熱病にかからないことを明きらかにしました。

ところが、全世界の学者たちは、

「レストスピラはたしかに黄熱病の病原だろうか、なるほどよくにている。め

んえき血清がききめのあることからみると、それに近い病原ではあるうが、ほんとうの病原かどうかは疑わしい。」

などと、いい始めました。こうなると英世は、もうじつとしておれませぬ。アメリカの近くに黄熱病が流行すると、そのたびに出張して研究しました。

黄熱病研究の手は、どうしてももつとも黄熱病の流行する、アフリカまでのばさなければなりません。

「アフリカではレストスピラは見られない。」

「野口血清はききめがない。」

などと、いろいろの報告が来しました。英世はもういたたまれなくなって、アフリカまで出張して、それを解決する決心をしました。



「きみの行こうとする所は英領です。英領のことは英国人に任せておいたらいいじゃないか。」

「でも、ぼくは黄熱病研究をやりとげたいんだ。」

「きみのからだはアメリカのものだ。アフリカへ与えてしまうことはできない。友だちも政府の人々も、こういって反対しました。しかし、子供のように思い立つとやめることのできない英世の天性は、どうしても思いとどまることができず、そのため毎日なやみ続けました。」

昭和二年十月、ついにかれはアメリカを出発して、アフリカのアクラへと向かいました。

「着いてから五つの『きん』を見つけた。」

「研究は進んでいる。」

「おそくとも五月までには帰る。」

アフリカからは、しきりと電報が届けられました。研究をまとめるため、かれは五月の終りごろ、アクラをひきあげました。ラゴスへその土地の学者に会いに行ったのが十日で、十二日の朝、熱があるのに気がつききました。そこでアクラへ引き返そうとしましたが、海があれでずぶぬれとなり、陸に上がってすぐ病院にはいりました。そして、黄熱病と 진단されました。

英世は発病九日目にして、こんな状態となりました。かすかに目をあけて、ともに研究にはげんだアクラの研究所長、ヤング博士をかえりみしました。

「きみはだいじょうぶか。」

「だいじょうぶです。」

この言葉が最後でした。時に英世は五十三才。「だいじょうぶです。」と答えたヤング博士も、やはり黄熱病にかかっていたのです。その二十九日、同じようになくなりました。このふたりの死によって、英世の最後の研究は、永久に



消えてしまいました。

ニューヨークのウッドローンの墓地には、次のように書いた墓石が建っています。

その努力は科学にささげつくされたり

博士の一生——それは学問のために命をささげることでした。しかも、ささげようと思つてささげたのではなく、すきな研究をただもう子供のような熱心さで追い求め、ついに死のかなたまで追つていったのでした。

お仕事の手引

(一) 立ちあがるすがた

(1) 「立ちあがるすがた」には三つの話のついで、結び合っています。それぞれの話を比べて研究してみなさい。

(2) 新しい日本を作り上げていく力はなんでしょうか。話し合ってみましょう。

(3) 「つちの音」で、いきいきとした感じの表われているのはどこですか。

(4) 「心のつえ」で、いちばんむねを打たれるのはどこですか。それはなぜですか。

(5) 「心のつえ」に、にたような話があったら、それについて話し合ってみなさい。

(6) 「ふたつの柱」を読んで、つぎのことを研究しましょう。

○ ふたつの柱とはどんなことですか。

○ ダルガスの仕事とグルトンウィーの仕事との関係について話し合いなさい。

○ 「神はみずから助くるものを助く」というのは、どんなことですか。こんなのを格言といえます。いろいろ格言を集めてみましょう。

○ ダルガスもグルトンウィーも、どちらもむずかしい仕事を完成することができたわけを考えなさい。

(7) 「どんだん」「ふらふら」「ぐんぐん」というように同じ言葉がかさなって、できた言葉があります。こんな言葉ができるだけたくさん集めてみましょう。そうして、それがどんなようすを表わす時に使われるかを調べてみましょう。

(8) つぎのような言葉を使って短い文を作ってみなさい。

- ・と、いわなければなりません。
- ・であろうし
- ・どうせ

・ほどであった。

- (9) 「つちの音」をシナリオのように作ってみなさい。シナリオについては、「四年生下」の「白鳥物語」「六年生上」の「初夏と子供」などを参考にしなさい。シナリオは、えい画の一場面一場を言葉で表わしたものです。だから、言葉から絵がはつきり、うかび上がるようにすることがだいじです。

- (10) これから、みなさんはどんなにして、立ちあがろうと思いませんか。

- めいめいの思っていることを作文に書いてみましょう。また、それを発表し合っておたがい話し合ってみなさい。

(二) 初夏

ってみましょう。

また、集めたうたについて、みんなで話し合ってみましょう。

- (ロ) 「あゆ」と「わかば」は同じ自由詩ですが、よく考えてみるとちがったところがあります。それは、どんなところでしようか。

- (ハ) それぞれのうたについて、自分のすきなところを話し合ってみましょう。

- (ニ) みなさんもこのごろのことを、うたに作ってみましょう。

- (3) 「野道を行く」は、初夏の野道を歩いて、見たり感じたりしたことが、たいへんうまく書かれています。

- (イ) どんなところに、初夏のようすが表わされていますか。

- (ロ) 表わし方のうまいと思うところを、みんな話し合ってみましょう。

- (1) 「一 あゆ」から「三 初夏と子供」までを讀んで、いつごろを初夏というかを考えてみましょう。

- (2) 「一 あゆ」のところを讀んで、つぎのことを研究しましょう。

- (イ) ここには、初夏の景色やものをよんだうたが、三つに分けてのせてあります。

- 「わかば」と「あゆ」は自由詩、「なわしろ」は、はい句です。

みなさんが、今まで習ったり讀んだりしたうたを、できるだけたくさん集めてみましょう。集めたものを、つぎのようなめあてで分けてみるのも、おもしろいと思います。

△形はどんなになっているか。

△どんなことを取りあげているか。

この外の分け方が考えられたら、それもや

- (ハ) みなさんもこのごろのことで、心に強くまとったことがあったら、それを作文に書いてみましょう。

- (4) 「初夏と子供」のところを讀んで、つぎのことを考えましょう。

- (イ) こんな形の文章はなんといえますか。

- (ロ) 文章は二つに分かれています。どちらも初夏の子供の生活が表わされています。

前半は、どこの子供のことでしょうか。後半は、

また、それぞれの子供たちは、どこに初夏を見つかるでしようか。

- (ハ) 場面と場面とのつながりを考えてみましょう。それぞれの場面を、絵にしてみるのもおもしろいと思います。

(三) ラジオ

- (1) 「この音というものの効果をうまく利用して、

いるのがラジオである。」
と書いてあるが、実際にはどんなに効果を利
用しているのか、れいをあげて、討議してみ
ましょう。

討議の目のつけかた

- 実際にラジオ放送を考えてみることに。
 - 音の効果をうまく利用するということ。
 - どうしてそんなになつてきたか。
 - これからどうすればよいか。
- (2) 文字の言葉と話す言葉とのちがいについて、
研究しましょう。(ノートに整理する)
- (3) ラジオで使う擬音(きおん)について、研究
してみましょう。(ノートに整理する)
- (4) 放送する場合、どんなことに気をつけて話
したらいいのか研究してごらんなさい。
- (5) ラジオのために、わたくしたちの話す言葉
はどんなえいきょうを受けているか研究して、

友だちと討議してみましょう。

討議の目のつけかた

- よいえいきょうを受けるか、それとも悪
いえいきょうを受けるかということ。
- (6) ラジオの番組を実際に研究し、放送される
形式について調べ、ノートに整理してみなさ
い。
- 例えば
- ひとりの人が自分自身の考えを、みんなに
話す形。(○○の話など)
 - ふたりで話し合う形。(朝のほう間など)
 - 話す問題を決めてふたりで話し合う形。
○ げきの形。(かねの鳴る丘など)
- いろいろあるから、よく考えてみなさい。
- (7) 「北米かいたく者」は放送げきです。放送げ
きとふつうのげきとのちがうところは、どこ
ですか。

- (8) 放送げきでは、場面が変わる時にどんなく
ふうをしていますか。

- (9) 「北米かいたく者」という放送げきには、場
面がいくつありますか。

- (10) この放送げきを読んで、どんなことを考え、
またどんな気持がしたか、友だちと討議して
みましょう。

- (11) 「かいたく者精神は、人類のもつ永遠のわか
さであります。」ということについて、友だち
と討議しましょう。

- (12) 友だちと話し合つて役わりを決め、実際に
話し方を研究してみましょう。

- (13) 小学生向けの放送をみんなで聞いて、それ
を中心に、話されたことから、話し方などが
どうであったか、友だちと討議してしましょ
う。

(四) なぞをとく

- (1) 「水の色、空の色」のところを読んで、つぎ
の仕事をしてごらんなさい。

(イ) このところでは、いくつのなぞがとかれ
ていますか。ノートに書き上げなさい。

(ロ) 海の水、よどんだふちの水が、青く見え
るのは、なぜでしょう。

同じ水でも、茶わんの水、コップの水が青
く見えないのはなぜでしょう。

青く見える実験の仕方があったら、話して
みなさい。

(ハ) 空の色の青く見えるわけを、かんたんに
書いてみなさい。

何万メートルの上空にのぼつて空を見上げ
た場合と、地上から空を見上げた場合と、
同じですか、ちがいますか。もしちがうと
したら、そのわけはなぜでしょう。

- (2) 「電車の中」を読んで、つぎのなぞを、短く、

はっきりと書きなさい。

(イ) 電車が急停車した時、乗っている人が前にたおれるわけ。

(ロ) 電車が動きだす時、乗っている人がうしろにたおれるわけ。

(ハ) バットで打ったボールが、とぶことをやめるわけ。

(ニ) 同じ人が、足をふむとしても、ぞうりの時より、げたの方がいたいわけ。

(ホ) スキーやかんじきは、どんな理くつを応用したのですか。

(3) 「水の色、空の色」と「電車の中」と、その書き表わし方を比べてみて、どんなちがひがあるか、つぎの言葉を使って、書いてみなさい。

○ 口語常体の文。

○ 口語敬体の文。

○ 対話の形で、説明している。

○ 作者が、ひとりで説明している。

(4) 「なぞをとく喜び」を読んで、つぎの仕事を考えてみなさい。

(イ) アルキメデスのといたなぞは何ですか。

(ロ) アルキメデスは、なぞのとき方を、どんなことから思いついたのですか。

(ハ) 学問上のなぞをとくことは、どんな役に立つのですか。

(5) 「水の色、空の色」「電車の中」「なぞをとく喜び」と、三つの文章がならべてあります。この三つの文のねらっている目あてがどこにあるか、この文章の中の言葉を使って、まとめて書きなさい。

(6) みなさんのといたなぞを、題として、作文を作りなさい。

(再) 学校自治会

(1) 「心の花」と「学校自治会」と「人と人とのつながり」は、文のねらいが つぎつぎと 発展し、しかもいつも結び合っています。だから、全体を一つのものとして読みとることもできます。三つの文のねらいが、どのような関係にあるか調べてみなさい。

(2) 「心の花」を読んで、つぎのような研究をしてみなさい。

○ 「心に花をかける」とはどんなことか。

○ ひとりの人の心が美しくなれば、日本の心が美しくなるというのは、どんなことか。

○ この文の中で、だいいいな言葉はどれか。ノートにぬき書きしよう。

(3) 「学校自治会」の文を研究する手がかりは、つぎのようなものです。

○ 議長はどのように話を進めていますか。

○ ここには、三年生から六年生までの子供

が出ていますが、学年によって話の進め方が どんなにちがっていますか。

○ 話し合いたいせつなことは、自分のいうことをはっきりと、わかりやすくいうことです。この文で、それがどんなところに 出ていますか。

(4) 実際に、自分たちが自治会をする時のことをいろいろ研究してみなさい。

○ 言葉づかいについて、どんなことに気をつけたらよいでしょう。

○ 発表する時のメモは、どんなふうにとめたらいいだろう。

○ 自治会の記録は、どんなにしてまとめるのがいいでしょう。

(5) 「人と人とのつながり」を、つぎのようなこととがらに目をつけて研究しなさい。

○ ここで言っていることは、短くいえばど

んなことでしょう。

○ それは、自治会とどんな関係があるのでしょう。

○ この話から、あなた方はどんなことを考えましたか。

(6) 「人と人とのつながり」を読んで、自分たちの幸福とはどんなものかを考え、いろいろな文に書いてみなさい。

(7) 文には、およそつぎの四つの形があります。今までに学習した一つ一つは、つぎのどれにあたるか調べましょう。

一 物語、童話など。

二 詩、和歌、はい句など。

三 げき、シナリオ、対話など。

四 記録、日記、ずいひつなど。

(六) 野口英世

(1) これは、野口英世の伝記を書いた物語です。

つたから。

(ロ) 渡部先生に、かたわの手をなおしてもらったから。

(ハ) 小林先生にすすめられたから。

(4) 渡部病院で英世は、どんなにはげしい勉強をしましたか。また、それはどんなところに現われていますか。

(5) つぎのわけを考えましょう。

(イ) 英世がアメリカへ渡るようになったのは、

(ロ) アメリカから、日本へ帰るようになった

のは。

(ハ) はだか一かんでアメリカへ渡った英世が、世界の野口としてむかえられるようになったのは。

(6) 墓石に書いてある、

その努力は科学にささげつくされたり人類のために生けるかれは人類のために

たいへん長い文章ですがよく読んで、つぎのことを研究しましょう。

(イ) おかあさんが英世を思う愛の心持は、どんなところに表わされていますか。

(ロ) 英世のおかあさんを思う心持は、どんなところに表わされていますか。

(ハ) おかあさんがいっしょうけんめいに、働いたわけを考えましょう。

(2) つぎのわけを考えましょう。

(イ) 英世が「よし、勉強するぞ」と決心したのは。

(ロ) 英世が、高等小学校へ行くようになったのは。

(3) 英世が「医者になろう」と決心したのは、なぜですか。つぎの中で、いいと思うものに、○をつけましょう。

(イ) おかあさんが「医者になれ」とおっしゃ

死せり

の言葉は、英世のどんなところをいったものでしょうか。

(7) つぎのそれぞれの時代の英世は、どんなでしたか。みんなで話し合ひましょう。

△小学校時代。

△高等科時代。

△渡部病院の書生時代。

△アメリカへ行ってから。

△アフリカへ行ってから。

(8) このお話は、ほかの人が英世の一生を書いた物語です。みなさんも、自分が生まれてから今までのことを、物語に書いてみましょう。(こんなのを、自じよ伝といひます。)

せんじょう	せんべんばんか	せんたくもの	せんこう	せんはんしゃ	ぞうり	そつぎやう	そなえつける	そよぐ	それとも	そんけい	そんざい	だいいちにんしゃ	たいこ	たいせいよう	たかやましかがくいん	たがやす	だしそびれる		
22	79	48	103	79	85	123	101	46	103	93	135	130	47	62	130	64	71		
ためる	たゆまない	たより	たんけん	ちからぞえ	チカチカ	ちかつた(ちかう)	チャルメラ	ちゆうしゃ	ちようかい	ちわきせんせい	つくした(つくす)	つち	つまづいて(つまづく)	つまり(つまる)	ていあん	てつどう			
118	24	124	57	133	40	17	5	133	97	180	14	4	107	125	102	73			
てん	てんじて(てんじる)	てんせい	てんかい	デンマルク	ドア	ドイン	とうもろこし	とうげみち	とうめい	どうろ	どうじょう	どくがく	としごろ	としつき	とじょう	とだえがち	となりあう	とびぬけて	
29	114	133	43	20	41	21	59	48	75	105	123	128	13	127	120	15	50	125	
とまどい	とりあつかう	なえば	なごり	なつもの	ななめ	なにしろ	なまげがち	なやむ	におう	にしインドしよう	にまめ	にゆうがく	にんたい	ねん	のうか				
54	47	34	137	43	38	69	121	117	32	62	5	9	135	121	33				

さいきんがく	さいじょうぎゆう	さかのぼる	さぎよう	ささげる	さしかかる	ざつおん	さつき	さつきやみ	さなえ	さまたげる	さわやか	さんもん	さんぎよう	さんざん	しあげる	シカゴ		
132	99	10	99	142	48	50	29	40	40	83	46	32	20	21	65	57		
じくみ	じさつ	じしん	しじん	しすこ	しだい	じちがい	じつもん	じつち	しつれい	しのびね	しばい	しめい	しめす	じゃがいも	しゆうきようか	シユレスウイヒ	しゆじゆつ	じゆんちよう
115	16	35	26	10	91	94	103	128	52	38	49	68	84	60	25	21	126	126
じょうけん	じょうぎたおし	じょうがっこう	じょうわ	じよせい	じようきよう	じようきゆう	じようけい	じよか	しょうめい	シラクサ	しろいしやま	しんりん	しんり	じんるい	しんしん	しんこんち	すがすがしい	
20	80	12	119	16	129	121	47	28	61	92	102	23	92	142	48	57	96	
すき	すなぢ	すなお	すばやく	ずぶぬれ	すべて(すべる)	すやすや	すらり	せ	せいけつ	せいと	せいふ	せいだか	せいぶつ	せいぶつ	せいさんぶつ	せがしら	せつたいがかり	せわしげ
22	30	55	70	141	31	116	31	30	111	122	138	28	36	63	68	31	133	9

漢字

存 (135)	潔 (111)	隊 (92)	永 (73)	雜 (50)	示 (34)	論 (19)	菜 (6)
欲 (135)	個 (115)	貴 (93)	浅 (74)	因 (52)	次 (35)	欠 (20)	額 (7)
与 (136)	徒 (122)	共 (93)	量 (75)	困 (53)	竹 (36)	条 (20)	眼 (9)
療 (138)	卒 (122)	敬 (93)	応 (84)	標 (55)	展 (43)	候 (20)	福 (10)
政 (138)	官 (122)	周 (99)	非 (88)	準 (55)	乱 (44)	敗 (24)	幸 (10)
府 (138)	資 (124)	委 (101)	師 (89)	証 (61)	得 (45)	志 (24)	医 (11)
清 (138)	博 (132)	拳 (101)	衆 (90)	諸 (62)	例 (47)	宗 (25)	申 (12)
墓 (142)	士 (132)	提 (102)	減 (91)	耕 (64)	寄 (48)	解 (25)	久 (18)
	授 (133)	案 (102)	増 (91)	未 (66)	演 (49)	似 (27)	講 (18)
	接 (133)	路 (105)	兵 (92)	便 (72)	効 (49)	救 (27)	義 (18)

国語六年生の編修について

一、本書は、教育基本法、学校教育法、学習指導要領一般編、国語科編、小学校国語科検定規準などの趣旨を具体的にあらわすことにとめた。児童の興味や生活経験や心理的発達に即して、単元学習をはかっているのもこのためである。

二、六年生用は上・下二冊とし、上は四月から十月まで、下は十一月から三月までに学習するよう構成されている。

三、本書は六単元からなっている。「立ちあがる姿」では、現状日本の姿を象徴して児童の心がまえをつちかい「初夏」では、すがすがしい自然の表現をおして味わわせ、「ラジオ」では、耳をおとすれる文化に関心を持たせ「なぞをとく」では、身辺に横たわる自然の不思議さに目をそがせるとともに、科学的表現の理會力を高め「学校自治会」では、かれらが経験して学校生活に対する反省を深め、最高学年児童としての

覚悟を持たせることにとめ、「野口英世」では、世界的偉人の人がらにふれさせて、児童の心に力強いものをあたえようと思っている。これらの六単元は、国語の学習活動をもととしながら、興味の幅を世界的なもの、科学的なものに拡大しようとしている。生活単元と要素単元との調和には、特別の注意をはらっている。

四、本書の新出語は、総数四〇九語である。文章は国語の敬体常体、両様をとっている。児童の生活語を用い、正確な、美的な表現をとっているのは、一つの注意点である。

五、かなは平がなを本体とし、擬声語、擬態語、外国語をうつつ場合にのみかたかなを用いている。漢字は七十八字である。

六、巻末に語い表と「お仕事の手引」をのせて、学習と指導の便をはかっている。「お仕事の手引」は、一つの例をあげたのであって、これからさまざまな学習活動がなされることを期待している。

Copyright 1950, by
The Gakkō Toshō Kenkyūkai

All rights reserved

The text of this publication or any part thereof
may not be reproduced in any manner whatsoever
without permission in writing from the authors.

小国 613

国語六年生 上

Approved by Ministry of Education
(Date 1950)

感謝のことば

左記の作品を本書に掲載させていただ
きましたことについて、著作者の方
々にあつく感謝いたします。

なお、規則や指示にしたがって多少
加除訂正のやむをえなかったことにつ
いて、御諒承をお願いいたします。

わかば……………児 童 作
あゆ……………室 生 犀 星 氏
野道をゆく……………前 田 夕 暮 氏
音というもの……………文 部 省
ラジオと言葉……………和 田 信 賢 氏
北米かいたく者……………宮 津 博 氏
人と人とのつながり……………吉 野 源 三 郎 氏

編者

廣島市東千田町
広島高等師範学校教諭

今石光美

大西久一

小川利雄

原田直茂

表紙

田原輝夫 さしえ 高橋 正人

昭和二十五年

月 日 印刷
月 日 発行

定価 円

著作者

廣島市東千田町廣島高師附屬小學校内
財団法人 学校図書研究会

発行者

東京都港区芝三田豊岡町八番地
代表者 川口芳太郎

印刷者

東京都港区芝三田豊岡町八番地
代表者 川口芳太郎

発行所

東京都港区芝三田豊岡町八番地
学校図書株式会社

本書の指導詩・ワレクブック・註釋書並びに
これに類する一切のもの無断發行を禁ずる

0
73

広島大学図書

010130449673



おことわり

本書の用紙は来年度使用教科書からより良質のもの（新教科書用紙）を使用することになつて居ります。